

第 14 回高等学校改革プラン推進委員会（第四推進委員会）議事録

1 日時 平成 17 年 12 月 18 日（日）午前 9 時 00 分～午後 1 時 00 分

2 場所 松本市浅間温泉文化センター 大ホール

3 出席委員

中條 利治委員長	野口 廣子委員
百瀬 哲夫副委員長	小山 勉委員
小口 利幸委員	下川 隆委員
宮川 正光委員	丸山 哲弘委員
小林 進委員	藤本 光世委員
神澤 鋭二委員	長谷川 功委員
今井 隆一委員	鈴木 義明委員

4 開会

（西牧主任教育支援主事）

本日は休日の朝早く、また、天気が悪いにもかかわらずお集まりいただきましてありがとうございます。それでは、委員長さんよろしくお願いします。

（中條委員長）

改めましておはようございます。第 4 通学区の第 14 回になりますが、推進委員会を開催させていただきます。最初に、事務局から前回以降の他地区も含めた条件についてご報告いただきたいと思います。よろしくお願いします。

5 資料説明(1)

（西牧主任教育支援主事）

それではよろしくお願いします。前回 12 月 8 日以降本日までの間に、第 13 回と第 14 回の第一進委員会が、それぞれ 12 月 10 日（土曜日）と 12 月 17 日（土曜日）に開催されております。また、12 月 11 日（日曜日）には第 13 回の第二推進委員会も開催されております。

12 月 10 日に開催されました第 13 回の第一推進委員会では、中条高校の志願者状況や地元中学の進路動向等の現状を考え、現状の設置は難しいという意見が大半を占め、統合はやむを得ないという意見、分校化するという意見が出されております。また、分校としても小規模化に有効な魅力づくりは可能なのかという疑問も出されております。さらに、ここでは長野南高校と松代高校の統合についても検討されました。昨日開かれました第 14 回の第一推進委員会では、この長野南高校と松代高校の統合について、少子化の状況から通学区全体を見渡した上で統合を前提とし、第 3 区からの受け入れや地域の 15 歳人口等のことを考えると、長野南高校の校舎・校地を活用するということも考えられるのではないかという意見が出されております。なお、多部制・単位制高校の配置の問題についても、審議されましたが、次回継続して検討していくということになっております。

それから、12 月の 11 日に開かれました第 13 回の第二推進委員会では、望月高校を多部

制・単位制に転換するという地域からの提案について、引き続いて議論されております。地域の協力が得られることがメリットであるという意見、それから、交通の利便性については疑問があるという意見が出されました。多部制・単位制高校の配置は鉄道沿線が望ましいという意見も多く出されておまして、望月高校と蓼科高校を統合する案とも関連するため、第6区の再編について、引き続き検討していくことになっております。

以上が、他の推進委員会の状況でございます。

以下高校教育課西牧主任教育支援主事から資料説明 【説明内容省略】

6 議事

(中條委員長)

ありがとうございました。

それでは、今説明あった中で委員の方々だけということですが、県会の一般質問15ページに、新聞報道も一部されていましたが、この第4通学区に関する質疑がされていますが、そこについての特に補足等県教委から必要あれば、なければ結構です。よろしいですか。はい。分かりました。

それでは、今日配布いただいている資料の中で、地域関係の要望が幾つか出されています。ひとつは、北アルプス広域連合から、長野県高校改革プラン推進に関する意見、提言。それから、木曽3校連絡協議会の要望書。それから長野県スキー連盟からの要望書。それから最後、特別支援教育を考える有志ということでの高校改革プランへの要望書。この4点がございまして、今日この中で北アルプス広域連合からの提言に関して、直接我々推進委員に、ご説明したいという申し入れ、要望がございましたので、短時間ですが、簡潔にお願いしたいと思います。最初をお願いをしたいと思います。それでは、広域連合大町市長の腰原さんお願いいたします。

(北アルプス広域連合：腰原)

おはようございます。ただいまご紹介いただきました、北アルプス広域連合大町市長の腰原です。高校改革プランに関して意見、提言を説明する機会を与えていただいたことに感謝しつつ申し述べさせていただきたいと存じます。

大町市につきまして、委員会を開催していただきますとともに、今回このような機会をもうけていただきしたことに、あらためて深く感謝をしたいと思います。

前回の会議では、多くの大北地域の方々が傍聴することができました。高校改革に関する地域の関心が一層高まっているところであります。今、この問題を考えますときに、県教育委員会が6月末に再編整備候補案を出してから、県高校改革プランの方向はある点では、残念ながらレールの上を走りだしてしまった、あるいは、見切り発車をしてしまったのではないかという思いが、募ってまいります。と同時に、時間をかけて欲しい、時間をかけて欲しいということが、大変に禁じ得ないことであります。

去る12月4日大町市で開催されました、第13回推進委員会では、大北は4校維持ではなく、再編を議論するという方針が当委員会の中で示されました。その方針を受けまして、大北地域の4高校関係者は、高校の再編に関しまして、その対応について、加熱した議論をいたしましたところでございますが、そんな中で本日の推進委員会では、場合によ

って多数決によってでも大北地域の4校の再編が、決定されるのではないかという危惧(きぐ)もありました。高校のビジョンづくりを含め、検討する中でどうしても時間が足りない、もっと時間が欲しいというのが、全会一致で確認されたところでもあります。このことを、ぜひとも推進委員の皆さんに、訴えさせていただくことに、なったわけでもあります。

その過程におきまして、ビジョンの実現に向けては、地域自らが積極的に、地元の高校教育の発展に関わりを持って行こう、各校の魅力づくりに、邁進しようと、この2点を基本線とすることが再確認されたところでもあります。まさに地域を巻き込んでの、議論が広がりを見せ始めました。従いましてこの推進委員会での実務的なことにふれますことは誠に不本意でありまして、時間が少ないということ、ぜひお氣にかけてもらいたいと思います。

推進委員会では、結論を出さない、議論が成熟していない点については、このようなご選択も1つだということと思います。

それでは、4校ことについての具体的について申し上げたいと思います。報告にも文面があると思います。

大町高等学校は難関大学をはじめとしまして、多くの生徒が希望する大学等に進学することを、可能な限り追求する高校を目指します。平成5年に理数科が開設されておりますが、理数科の理工系大学を目指すことから、さらに文系大学を目指す、特進コースが求められております。かつて、大町高等学校は長野県のナンバー6校といえます学校ナンバーを、つけられた高等学校でもございます。生徒の期待に応えるためには理数科を、理系特進コースと改名いたしまして、位置付けを明確にし、別に文系特進コースを、新設することが多様化する生徒の要望に応えられることと思います。理系特進科1学級、文系特進科1学級、普通科1学級の5学級の進学対応高校を将来ビジョンといたします。

大町北高等学校は、地域高校として地元自治体や地元地区とも連携をとり、保護者や地域住民が学校運営について積極的にかかわりをもつコミュニティ・スクールを目指します。

アジア、アフリカ難民支援活動の充実と、大町市が友好提携しております、オーストリア・インスブルック市、アメリカ(カリフォルニア)・メイドシーノ市、など世界各国の文化交流なども、盛んに進められておりますので、これらも地域との交流や、交換留学なども視野に入れまして、国際力や語学力の向上を、目指す国際理解系のコースを開設いたします。

また、演奏や情報処理等の学習に、重きを置く情報表現系コースや、芸術関係や家庭科、スポーツのコースにも対応できるライフデザインコースも充実を図ります。そのことによりまして、入学を希望するその生徒が増加するも考え、1クラス増加することも考えられると思います。

また、大町市では遠距離通学者や今回の市町村合併におきまして、ある面では過疎の地区もあります。旧八坂村、旧美麻村などがございますほか、農村では進めております山村留学の学習を受け入れる、高校生徒専用の寄宿舍80人も用意するなどの支援策を考えてまいりたいと思っております。

池田工業高等学校は、大北地域、安曇野市地域内地域唯一の、工業系地域職業高校として、実施社会の要望に応える、総合科学技術高校を目指します。技術情報系学、会計学、建築造形土木系学科を主力といたしまして、工科系の勉強を、含めますとともに、各種ラ

イセンス取得の機会を与え高校卒業後即戦力となる最先端技術者の育成と、高度な工科建築技師等の選択の道確立いたします。地域の要望が、最も多い福祉部門と大学進学希望に対する策として職業意識の高いよき生徒を含めまして、全日制福祉系普通学校設置、さらに定時制普通科も開設する。また、生徒を通学環境を整備するために、ＪＲ等交通機関にも支援を募り、また、ソーラーカーや機械クラブやロボットクラブなど、生徒のやる気を地元企業が支える体制を確立し、将来に向け全日制４クラス、定時制１クラスの適正規模の地域高校を目指します。

白馬高校では、中高一貫教育高校全国募集の高校を目指します。白馬、小谷両村中学生も３０パーセント強が進学する地域高校である。また、豪雪地域でもありまして、大町市内高校まで２５キロ離れておりまして、冬期間は特に生徒たちも、親自身たちも移動手段に苦慮する地域でもあります。中国や各地の国からも留学生も受け入れ、交流が非常に盛んな地域であります。来年度は２名の韓国からの生徒が、来日する予定でありまして、学校ならびに地域の活性化に、大いに貢献をいたしております。白馬高等学校、白馬、小谷中学を連携型による中高一貫教育や普通科の高校としてスキー部員の全国募集を行います。

以上、大北４高等学校の将来におけるビジョンを申し上げました。今後各高校の魅力づくりについて、大北一丸となりまして、学校の声や要請を含めて、地域ぐるみで相互に連携を取り合って、掲げてまいりたいと考えております。

さて、第１１通学区におきましても、議論はこれから本格化することです。大系線沿線高校というご発言にありましたように、第１通学区の議論は、第２通学区に大きく影響をいたしますので、平行して第１１通学区も議論を、進めていただきたいと要望いたします。

大規模校は、第１１通学区に集中いたしておりますが、この大規模校の学級数や小規模学校や郡部の学校の再編に、大きく影響を及ぼしているものと考えております。それから、近年新設されました明科高校、地域との影響が薄いという声もあり、さらには官から民へも流れる中、官から民へも流れる中に、第１１通学区には多数の進学校があるそれから中学も必要を念頭に入れ、私学への進学も念頭に入れていただきまして、県立高校は必要とされる費用と配置を念頭に入れていただきまして、総合的な検討をしていただくことをお願い申し上げるところであります。

併せまして、第１次入学者希望調査本年１１月１日に、新聞各紙を見ますと、第１次入学志望者、志望調査を見ていきますと、第１１通学区にございまして、志望者数が極めて少ない学校と、志望者数が集中する学校とが混在する現状や地元出身者がどのくらいその地区に進学しているのか、あるいは各校がどのように魅力づくりにどう取り組んでいる等々、第１０通学区、第１１通学区も高校改革の議論を進めていただき、教育の機会均等ということについても必要な検討課題ではないかと考えております。

今回、議論を進める中で、あらためて痛切に感じておりますことは、大北地域という範囲では、高速交通網から取り残された地域におきまして、今４校はまさに地域のシンボルでありまして、地域の活力の源とも過言ではございません。当地域にとりまして、４校はなくてはならない、かけがいのない存在であるということでもあります。今後その地域の高校は、その地域住民や自治体の支援が不可欠であるとあらためて強く感じているところでもあります。

しかし、今回のように短時間での変更では、とうてい住民からの理解支援がされないであらうと考えておりました。だれよりも今一番影響を受けておりますのは、子どもたちであります。現在小、中学校での現場では、非常に困惑いたしております。選択肢を迫られる中学3年生からは、わたしの希望している学校は無くなるのです。どこを受験したらよいのでしょうかと、担任は生徒から頻繁に聞かれ、中学校の先生方は返答に、大変苦慮しているという状況でございます。また、受験する生徒も同時に親の心配や悩みも半端な状態が続きますし、それは深刻であると思っています。

次に、高校改革プランの教育委員会の委員長をお勤めになりました、葉養東京学芸大学教授の再編の報道された発言では、現在の推進委員の議論は労を正し決して、否定することはない、地域住民の前で、少なくとも2年、3年の時間をかけて、ゆっくり議論をするとともに、高校の跡地利用や財源を含め、検討するべきと紙上では理解をいたしております。

また、最後は今開催されております、県議会でも一般質問これは委員会との質問でありまして、その大半が慎重にという意見にあるように、やはり県民の皆さんのこの教育に関して、廃止案に対してどうか慎重にという、そういう県民の思い、わたしは現れではないかと、このように確信をいたしているものでございます。

大北地区に限らず、まさに皆さん同じ気持であるのではと考えております。どうか推進委員会におかれましては、この地域住民の取り組みに、ご理解を賜りまして早々に決定がされることだけは、避けていただきたい。

また、教育委員会におかれましては、県下の全高等学校の再編や魅力づくりについて、地域住民が自主的かつ積極的に語り合う時間により、再編案の提言する、練り直しを再考いただきますよう強く要望する次第であります。

終わりに当たりまして、推進委員会議委員の皆さまには、極めてご多忙の中本日で14回ということであります。委員会も開催され、真摯（しんし）にご検討されてまいりましたことに対しまして、あらためて信義なる敬意と感謝を申しあげる次第でございます。ですので、過日、県議会に、文教委員会におきましては、全会一致で県教育委員長の再任を否決したことは十分大きな意味ももっていると思います。

県教育委員会の進めている高校再編の手法がやはり、あまりにも急ぎすぎではないかと。もっと時間を掛けて慎重に議論をしてくださいという、委員会の方針というところであります。

県教育委員会におかれまして、ぜひ地域のために、速やかに全体の再編案を再検討していただきまして、高校改革の原点に戻って、県全体での魅力ある高校とはなんぞやと、その議論に立ち返っていただきたいと思います。どうか推進委員の皆さま方、賢明なご判断、再編100年の計になったと言われるようなご判断をいただくようお願いし、終わりといただきます。

本当に貴重な時間お与えいただきまして、本当に感謝をたく申し上げ、以上再編計画とさせていただきます。

(中條委員長)

ありがとうございました。何かご質問等ございますか。よろしいですか。はい。

それでは、最初に前回 13 回の議論を簡単に振り返って 14 回、今回につなげていきたいと思えます。それからその前に、今日は私のほうから委員の皆さんに、無理をお願いしまして、9時から13時ということで4時間をとっていただきました。

従って、休憩は真ん中あたり2時間の経ったところあたりを前提にということと、それから今日予定しております内容が、もし早く方向付けといいますか議論が、まとまれば早めに切り上げることも踏まえて、進めていきたいと思いますが、ご協力をよろしく願いたします。

それでは、私的なメモで恐縮ですが、前回12月4日開催第13回の大町市で行いました、推進委員会の議論の内容について、口頭で申し上げておきます。

まず、前回の大北地区の第3回目の個別論議をしました。旧12通学区ということです。最初にご意見いただいて、再編の方向付けについてということで、議論のまず進め方を確認しました。その後で、学級数を増やしたら本当に4校維持が可能なのか、どうかというところを、しっかり議論確認しないと、我々として次の議論に進まないというご意見がありまして、それをまず最初先ほどの4校の関係者からの、提言を踏まえての、学級増すれば4校の維持できるのかどうか。

ただし、我々とすれば単に数の議論ではなくて、これまで12回の議論を踏まえて規模の問題、魅力の問題等々ふまえて、議論をしようという前提で進めました。

出された意見を簡単にご紹介します。我々は部会設置をせず、地元の関係者の提言、関係団体の提言意見を聞くことで、それに置き換えてきた。

従って、少なくとも我々よりは、情報量の多い中での地元からの提言を、尊重すべきである。この4校提言内容は優れており、2学級増やしてもいいのではないかというご意見。また、過去の学級数削減の際の、地元の動きはどうだったかと、いう質問がありまして、県教委からは、教育7団体からの要望としては、過去にそうした事例は把握していないと。それに対して、そうはいつでも県立高校であって、仮に地元に対抗の声があったとしても、なかなか県に対してのものが、いえないという実態があるという、ご指摘もございました。また、学級数を増やしても、2次募集で、埋まるのではなくて、一時募集で埋まることが重要だと、それは学校そのものの魅力いかにあるかというご意見がありました。

また学級増によりどのような影響が想定できるか、というご質問に対して、県教委は過去大町地区2校が100パーセントをきったり、二次募集をしてうめてきた時代があると、というような説明がありましたが、直接的な回答ではありませんので、以前9月18日にも同じような議論が、ありましたのでその答弁を紹介しております。

そのほかでは県教委では、ある特定校への集中や、特に先ほどもありましたが、第4通学区には私学もございしますが、これも公私連絡協議会等々の、私学への影響も懸念されるということでした。

それから大北地区の南志向、いわゆる南志向の歴史的経過についてどうかという、ご質問に対して、県教委から平成15年までは、調整区というのがありまして、その後でパーセント条項(10パーセント条項)があったのですが、15年に大通学区制に変わった際に、塩嶺トンネル開通の影響もあって、旧11通学区の塩尻方面から旧第7通学区の岡谷方面への

通学が、かなり増えたという影響もあったけれども、平成 15 年のパーセント条項撤廃に伴っても、大北地区にとってはほとんど変化は見られなかった。過去それから今を含めて、それほど変わっていないということだと思います。

募集学級の想定の根拠はどうかと、いうご質問に対して県教委からは、これまでの経過を含め、教育情勢を説明していただいた後、今年度生徒減 33 名だったと思いますが、生徒減でも大北地区の募集定員 480 名は変えていない。それに対して平成 17 年度今年度の大北地区の各高校について、志願者数、倍率が増えていない現実があるというご説明もされました。また学級増という提言に対して、学級を増やせば白馬からの流出が、加速されるばかりでなくて、大町から白馬へ進学している 20 名も、いなくなるとみるべきで、白馬高校の存続の心配であり、それを考えると学級増は、困難ではないかという意見です。

地域高校を育てるという意識は、大切にすべきであるという意見。全体の減少の中での学級増は困難であろうという意見。今は子どもたちが、自由にいける時代であっていかにか魅力付けをするかが、本来であろうという意見。また第 4 通学区で 3 校削減というのは魅力づくりから逆行するのではないかと、いう意見がありました。

こういう意見を踏まえて、再編の方向付けをさせていただきました。これは単に学級増をすればというのではなくて、今後の予測や、これまで検討してきた我々の本来の魅力づけ等々踏まえて、将来の子どもたちの望ましい姿を前提に、各自、各委員の方々に、ご判断していただいた結果だという前提ですが、前回欠席者 3 名の方も、県教委事務局から事前に、意見聴取いただいております、それを含め 14 名中 1 名の反対意見がございましたが、残りの方々につきましては、4 校の維持は困難であるということから、再編はやむなしということで、確認されまして、その後個別論議、具体的にどこどこに、どのように統合するかというように、入ることにしました。

冒頭でしたが、ご意見として再編案で、木曽と大町の統合形態が違うが、これはどうしてなのかと、いうご質問がありまして、個別論議に入った際に、確認いたしました。県教委からは、木曽と異なって普通科同士であり、かつ効率性や効果を考えた結果であるとの、説明がありました。

続いて白馬高校の方向付けに入りまして、統合案を考える上で、白馬を単独校として本当に維持存続出来るのかが、ポイントになるのではないかと意見等がありまして、時間の関係で、次回つまり今回への持ち越しということに、させていただきました。

お手元に先ほどの資料とは別に、幾つか配っていただいております。大北地区の個別論議の検討と、第 11 通学区、旧 11 通学区になりますが、松塩、南安の個別案の検討、ポイント、それと私のほうで勝手に作りましたが、統合案の検討に当たっての、メリット・デメリットの比較。それともう 1 点、私の方からお願いしまして、大糸線沿線・篠ノ井線も含めてもらっておりますが、各高校からの最寄り駅までの所要時間及び学校からの距離と、ということで事務局に依頼し、つくってもらいました。これについてご説明ありますか。簡単をお願いします。

資料説明(2)

高校教育課西牧主任教育支援主事から資料説明 【説明内容省略】

(中條委員長)

統合を考えるに当たって、大系線沿線含めて考えることにあたり、参考ということで私から、お願いをして出していただきました。今、事務局説明がありましたように、ソフトを使って計っていただいたので、多少数百メートル単位では、誤差があり得るという前提ですので、そう意味で見えていただければと思います。

それから議論に入る前に、先ほど大北地区 4 校連絡協議会の腰原市長からの提言を踏まえて、何点か私から触れておきたいと、思いますのでご了承願います。

1 点は先ほど旧 11 区通学区を、先に議論してから大北地区 12 区を議論すべきではないかということですが、これにつきましては、我々として与えられた期間の中での、方向付けとして今回は 12 区、時間があれば 11 区も合わせて、議論したいということで、私のほうで資料をまとめて、お配りさせていただいています。その旨、前回の委員さんにも、お伝えしておりますので、時間でいえば時間差がなく 11 区 12 区とも今日同じ日に、議論したいと考えておりますので、ご了承いただきたいと思います。

また 12 区大北地区につきましては、今回 4 回目の個別論議を迎えます。また 6 月末の県教委からの、いわゆるたたき台の提示からは半年間という時間的猶予があった事からみれば、これまで我々木曽地域につきましては、方向付けをしてきていますが、木曽地域の連絡協議会は、もっと短時間の中である程度地元の集約をしていただいた、という中で我々は今回ある程度方向付けをさせていただきたいと考えています。

それから 11 区と 12 区という観点からすると、我々の議論の中で別に境界があるわけではないので、分けて考えるのではなく、大系線沿線ということを念頭に置いてみるべきだということで、議論がありました。そういう意味でここにいる皆さんの念頭には常に大系線沿線ということを踏まえながら、これまでもまた今日も議論していきたいと思っておりますので、ご理解いただければと思います。そういう意味での心配は、大丈夫ではないかという気がしております。

それから今日いただいた提言、要望の中に、木曽 3 校連絡協議会の要望が、出されています。これは推進委員会の結論とは別に、林業大学との連携による、専修学校化の検討をするという趣旨の内容です。これに対して我々推進委員会としては、専修学校科のひとつの案であるということで、以前開催したあがたの森の文化会館で、木曽地域の方向付けを行った際に、それも一案としまして推進委員の皆様全員の意見を確認して、結果として木曽高校と木曽山林高校の、ジョイント的統合という結論付けを行いました。我々の検討ないし結論付けに対しては、それなりの重みを持っていると認識を持っておりますので、我々も真摯に検討した結果を、安易に覆せるとか、覆すべきとは認識しておりません。

ただし検討の中で将来的に、さらに学級削減が必要になった場合は、普職逆転を起こさず、また木曽地域普通科の、ウエイトをキープするためには普通科高校に、統合化される林業科に将来、そのしわ寄せがあって林業科が廃止されないか心配であるとか、または逆にキャリア選択肢の幅といいますか、拡充という意味で職業科も維持するためにも、専修学校化については将来的な課題として、最終報告に盛り込んだらどうかというご意見もございました。それに対して県教委からも、時間的制約があってこの委員会には間に合わないけれど、将来的検討課題として今後も研究していきたいと、いう旨の発言もいただいておりますので、そういう意味でも我々第四推進委員会の検討としては、この提言といいま

すか本件については、この内容で決着済みということで理解、判断をしております。

それでは議論に入っていきたいと思います。最初に 12 区大北地区の個別論議ということで、前回に引き続きで入ってまいります。お手元に例示として、大北地区の個別論議の検討ポイントとしまして、何点が挙げています。再編案そのものについては、もう一度確認いたしますが、我々として前回の合意事項、これは仮に学級数を増やしても、将来的には 4 校一律の存続は困難であるということです。

内容として、単純に 2 学級増すれば 4 校維持かという、数字上の検討だけではなくて全体として生徒数が減少し、すでに 4 学級、3 学級になっていることや、2 学級未充足の状況等に鑑みて、個々の学校の魅力づけという、これまでの我々の検討を踏まえて、上記の方向付けを行ったということになります。

2 番目の具体的統合についてということで、幾つか書いてあります。これはある程度効率を考えて私のほうで、A 案から D 案まで、まとめさせていただきました。これ以外ないわけではないのですが、ある程度この 4 案を中心に、議論させていただきたいと思います。異議等があれば後でご意見をまた伺います。

ひとつ A 案としては、大町高校と大町北高校を統合するという県教委の再編そのものです。B 案は、白馬高校を大町北高校の分校とすると、ただしこの案は白馬高校が、単独としての存続できるかどうか、その結果如何であろうと思います。C 案としては、白馬高校と大町北高校を統合する。D 案としては、池田工業高校を廃止すると、「廃止」という意味は、後で 11 区のところで一緒に議論したいと思いますが、職業科同士の高校を統合するという前提で、池工そのものは廃止をするという意味になります。

メリット・デメリットを簡単にまとめてありますので、少し説明をして、これ以外にも当然考えられると思いますので、その辺から議論をしていきたいと思います。

A 案のメリットとしては普通高校同士であるということ、それから 1.2 キロメートルだったでしょうか、隣接しているということで、県教委の再編案・たたき台もそうなのですが、常識的に考えると、こうしたことから出てくる案だろうと思います。将来的に合計が 5 学級もしくは、それを下回る可能性があるということで、ある一定の規模、我々も議論をしてきた、ある程度魅力としての規模の提供、子どもたちに提供ということからもメリットがあるだろうと。それからかつての男子校、女子校ということで、旧木曽西、東が 82 年に、統合されたのと似たケースなのかなと。

一方デメリットとしては、この高校は西、東と違いまして、すでに双方が共学化されています、従って統合した場合に、全体のレベルが低下しないかという心配、それから学級増をした場合、進学校のレベルが下がって、一方豊科への流出も、今結構あるわけですが豊科高校への流出が減っても、逆に白馬からの流出を増加させる危険性がある。そういう意味では、白馬の存続がこれによって半減なるかどうか、デメリットとしては考えられるであろうということです。

B 案ですが、メリットとしては大町地区の 2 校が、存続するということと、このままでいっても将来的に、白馬が 1 学級になって本当に存続が可能かどうか、その対応としてはこういう事も考えられるかなと。デメリットとしては、白馬高校そのものが、実質的に消滅をしてしまうということと、勝手な言い分になるかもしれませんが、全国的にみてナショナルブランドである白馬、大町よりその白馬のほうのブランドとしての、白馬という名

前がなくなってしまうと、いうデメリットも指摘出来るのかなと思います。

C案につきましては、メリットとして両校とも、普通科同士でかつ3学級、2学級ということでの、ある意味似たもの同士という学校だと思います。結果として距離が20数キロですか、JRで35分ということで離れておりますが、ジョイント校として5学級規模が、確保できかつ両方の校地が、利用できるということ。それから学級増をしたときに、豊科からは戻ってくる可能性があるし、逆に白馬からは佐野坂を越えなくても、同じ高校なので流出が、防止できるのかな。デメリットはここに矢印を付けましたのは、ここが一番ポイントかなという事なのですが、果たして20数キロ離れた高校同士を統合、ジョイントしても本当に統合メリットが出るのだろうか。

我々は数を削減することが、目的ではなくてある程度規模を確保しながら、子どもたちにそうした規模の中で、与えられる魅力とは、何ぞやということを、ずっと議論してきたわけですから、そういう意味でこういう統合ケースが、本当に魅力なり統合効果が上がるのだろうか、統合の結果として、そうした効果が出せるのかどうか、そこがクリアになるのかなという心配といいますか、デメリットに、いったん入れましたが、一番のポイントかなという気がします。

最後のD案です。これは農、商、前回まだ、合意された内容ではありませんが、南安の専門高校同士をジョイントしたらどうかと、いう意見がありました。これに更に加えて農、工、商の総合学科といえるかどうか、わかりませんが、農、工、商、合わせた総合学制的な高校が、連携として出来るのかどうかということ。デメリットとしては、ちょっと地図を配ってもらいますが、穂高、南農は、駅の距離が短い大系線にあっての3駅ということでしたが、池田はだいぶ離れていますので、先ほどのC案と同様に効果が出せるのかどうかこの辺が、デメリットとして考えられるのかなということです。

一応今までの議論を踏まえながら、地元からいただいたものを、頭に入れながら、取り敢えず4つにまとめてみましたので、これも参考にしながらということで、お願いいたします。これ以外に、こういうケースも考えられるのではないかと、いうようなこと、白馬高校の前回議論をした、存続可能性の問題等々踏まえて、先にご意見があれば伺った上でこういう進め方で、よろしいかどうかも含めて、ご意見を伺った上で、議論に入りたいと思います、よろしくお願いします。

(小口委員)

前回の議論の重複になりますが、この大北地域の4校のみに限って、削減を前提にすれば、白馬を残すか残さないかが非常に、確定的な要素になりかねないですよ、今広域連合長からのお話からもありましたように、この地図をみても穂高・池田・南安・豊科・明科も近いですよ、それとかけ離してどうこうしようと、いうのは私たち子どものためを思って検討している以上、そこに線を引いて大北で3校というのは、誰が見ても無理強いをしている感じがいたしますので、そこのところ委員会として、従来とおり旧第11通学区と切り離して考えるのか。そうではないと地域の声を聞きながらトータル的に考えるのかを方向付けしないといけない気がしますのでご意見を具体的にお聞かせください。よろしくお願いします。

(中條委員長)

小口委員のご意見は。

(小口委員)

この様な地図で距離を見ると、トータルで議論すべきだろうと思います。

(中條委員長)

トータルでみた結果、仮にこのエリアで見たら、どうなるかということはどうなのでしょう。

(小口委員)

当然、その結論は後でしかるべきであると思います。

(中條委員長)

小口委員ご自身は、トータルでみた結果として、このエリアをどうするかというご意見はありますか。

(小口委員)

そうということですか、極めて私見になりますが、委員長に異議はありません、総合学制的な高校、商業・農業どちらとも、そのへんのメリットは大北地域を含めて出てくるのではないかという気がいたします。

(中條委員長)

ほかの委員の方がいかがでしょうか。まずは進め方の問題からいきますか、いかがでしょう。

これは個人的な意見です、全体的にみるべきだといったときに、我々は数ある地区は「この谷で1校削減するから、こっちも削減しろ」というような、地域、地域で減らすのではなくて、ここのエリアのこの高校は、本当に存続出来るのであろうか、今の学級数でいいのかどうか。もしも、「こことここを統合したほうが、統合効果の上がりは将来考えられるのではないか」ということがまずあってその結果、「どことどこを統合したほうがいい」とか、もしくは「ここは統合しようにも、通学圏の問題で難しいのでそして子どもたちの通路を、考えたときにやはりここは、たとえ学級数が減ったとしても、残すべきだ」ということは、ある話だと思うのです。

ここで我々が勘違いしてはいけないのは、「木曽で議論したので木曽で1校減らしましたとか、大北で議論したので大北で1校減らしましたとか、松本で議論したので松本で1校減らしました」ということでは決してなくて。そのエリアでみたときに、当然全体を考えるとしても、蘇南に白馬の子たちが通えるわけがないのですから、ある程度のエリアを前提にせざるを得ないにしても、そういった中でそれをどうするか、そこの高校の子ども達にとっても、その高校の魅力はどうか結果として、2つにしたほうがいい、もしくはそのまま学級数が、減っても存続させるという判断を、個別にしてきた。

ただ申し訳ないのですが、議論の進め方として我々の第4推進委員会の場合は、天気予報でいえば北部・中部・南部と長野県全部にかかるエリアで、北から南までということですから、それなりに焦点を絞らないと、議論が出来ないということもあって、個別論議についてはある程度エリアを、絞っていただきたいという経過でできていますので、当然ここを議論するとしても、今小口委員がおっしゃった事も、踏まえながらここはどうするか、どうすべきかということ、ぜひ議論していくべきではないのかなと、思っています。

逆にそうした議論をするためにも、松本の地区で減らしたのだから、大北地区では(数合わせで)4校維持だと私は思いますが、旧11区を先にやったほうが、いいということであればそちらからの議論から、入っていてもやぶさかではありません。

(今井委員)

実際、大北に絞って論議をするとなっていますが、それを進めていく中で、やはり南の安曇のほうにある高校との関連というものを、まったく切り離して考えてやっているのではなくて、例えば大町のことを、考えようといったときに、必ず南のほうの学校との関係を、考えながら議論を進めていくというような形で考えていますので、今日の委員会でその大北に絞って考えていくと、いう形になっても、各学校の状況と方向を考える時に南の学校のことを、考えないわけがないと思っていますので、委員長のいわれる方向でいいと思います。

(中條委員長)

議論の順番は、11区から先に行かなくてもいいですか。

それから一応準備してきて、ふれなくてもいいかなと、思っていたのですがふれておきます。大北地区ということで「おおきた」ではありませんが、前回もそういう発言があって、新聞報道で「おおきた」というのをみても、大町の出身の委員がいないのは、不公平であるというようなやりとりが、されたという新聞報道、私はその場に立ち会っていないので、あくまで新聞の記事を鵜呑みにしたことしか、申し上げられないのですが、あまり今日時間がないのですが、2分、3分時間いただきます。

推進委員というのは、私も確認をいたしました、私を含めて選出経緯そのものは、県教委で選出しているので、私のほうではわかりません。一応学校関係者、校長先生だとか、教員の先生、保護者の方ですね。各4つの推進委員会共6名。それから自治体、地域の関係者の方々が4名。それから民間企業を含む、有識かどうかわかりませんが、私を含め一応有識者4名ということで、合計14名で構成されています。

この前提は、多様な意見をいろんな立場、立場で幅広く出していただくと、いうことが目的で、特定地域・特定地区の代表であったり、ましてや利益代表ということでは決していないということだと思います。従って、我々もここにいらっしゃる委員の皆さんも、出身母体等いろいろありますが、そこを離れて客観的にかつ公平公正にこれまで議論いただいたということで、私は非常に感謝をしております。

ただ、そういう意味でいえば、大町のご出身の方は、もしくは在の方はいらっしゃらないとしても、大北地区から2名の委員の方が、来ていただいていますし、それから校長先生等々、過去大町地区の高校にいらっしゃったとか、過去の調整区の学校にいらっしゃ

たという委員の方々もいらっしゃいますので、そうした意味でその大町であれ大北地区であれ、地域事情についてはある程度、理解いただいている方々が我々の委員の中にも、いらっしゃるということで理解をしております。

またその大北、最初の頃、確か「たいほく」なのか「だいほく」なのかと質問をして、「たいほく」じゃないでしょうかというやりとりが、確かあったような記憶していますので、我々自身、大北（たいほく）ということで、議論を進めてきているわけですが、ただ、とっさにとか、たまたま確かワープロで入れると、「たいほく」と入れても出てこないのですね。「おおきた」と入れるとなぜか出てくるのです。

そういうのもあって、もしかしてとっさに間違えたとしても、皆さん理解いただいて議論を進めてきていますので、そうした言葉尻のみをとらえて、先程の発言のようになってしまうのは、非常に残念だという気がしますし、決して我々名前を、理解していないわけではありませぬので、ぜひそこは、ご了承いただきたいと思います。

それでは、地図もいただいていますので、この辺参考にしながら進めていきたいと思いますが、今、今井委員から、我々大北地区の議論の際も、最初の個別論議であったように、大系沿線ということを考えながら、ということですし仮に松塩地区の高校を、1校なくしたから大北地区はいいんだという、数の論議ではなくて、例えば県教委の再編案、たたき台という位置付けですが、大町が今4学級ですよね、それから大町北が3学級、合計7学級ですね。

将来的に見れば、生徒減ということにいけば、7学級が維持出来ないということもあると、従ってある意味単独校で見たときに、3学級、2学級ということも想定され、もしくはしたときに、その規模で単独校同士がいいのか。それは、通学の問題はあるとはいえ、白馬が今2学級をきっています。地元の子どもたちも、3分の1しか進学しないという状況で、本当にこれでいいのかどうか。

そうした状況は、減少率の差はありますし、それから流出等々もありますが、学級を増やしたときにどうなるのか等々も踏まえて、南安それから松塩まで意識としては見ながら、議論をしてきていますし、これからもしてはいきたいと思います。

という中でそうしたことも踏まえながら、という前提で順番は先程、今井委員からは、大北を議論するにしても、そういう意見は内容の観点から議論しているので、このままでいいのではないかという、ご発言いただいておりますが、ほかの委員の方々はいかがでしょう。一応、沈黙を合意とみなしてよろしいかどうかですが。よろしいですか。

はい。では最初の順番で進めてまいります。

それでは、12区大北の個別論議のところ、ほかにこんなところが心配だとか、心配という意味はこんなことを考えたほうが、いいのではないかと、先にご意見があればいただきたいと思いますし、それから、前回は冒頭のほうで、ご説明したように、白馬高校が本当に存続できるのか、一応今日のご説明いただいた、大北地区4校の連絡協議会でよろしいでしょうか。提言の中にもありましたが、ただ個人的には、池田、白馬のこの内容は、前回4校の存続を考える会でしたでしょうか、その時の内容と、個別提言の部分についていうと、あまり変わっていないという感じがしていますので、さらにこれをどう具体的に進めるかという部分がないと、もう少し突っ込まないといけないのかなという気もしないわけではありませぬが、その辺含めてご意見があればお願いします。

(今井委員)

ひとつ白馬に直接考えるときに、ちょっとどうしても、もし白馬がなくなったときに通学ができなくなる子どもが、出てくるという問題がでてきますので、先週だったか、今週だったか、県教委の方で、通学できないような地域に、住んでいらっしゃる子どもたちに対して、支援策を行いますというような、発表があったわけですが、それは今、想定しているのがどんな内容なのか、ちょっと説明いただければありがたいです。

(中條委員長)

はい。それでは、吉江課長いいですか。

(吉江高校教育課長)

ご質問いただきましたのでお答えしたいと思います。私ども「具体的にこういうことをやります」ということを、申し上げたというような経過はございません。

ただ、お話の中では現在の程度を申し上げますと、遠距離通学に対しての貸与制度というものがございまして。これが遠距離通学の必要経費に対しての7割以内、上限で2万6千円以内というようなものを、これは月額でございまして、これを貸与してそれをその後均等に、お返しいただくという制度でございまして。

それでこの制度自体も含めまして、今後こういうような学校の再編によりまして、ある程度どうしても不便な地域、あるいは通学に支障があるようなお子さんが出た場合に、どうしていくかというようなことを、考えていかなければいけないんじゃないかと、いうようなことで申し上げた次第でございまして。

過去の例で申し上げますと、例えば、長野新幹線が開通したおりに、信越線がなくなってしまいました。それで、信越線がなくなってしまうということによりまして、以前信越線を使って群馬県に通われていた生徒さん、その群馬県に通われていた生徒さんが、JRがなくなったのでバス通になったと。それに対してどうするかというような議論が、当時これは企画局でございましたが、議論されたことがあります。

そのような形とは、ちょっと今回形態は違うと思っていますので、現状において例えば冬場に、もう通学がなかなか難しいということの中から、下宿をされている生徒さんもうらっしゃいますし、今現在、例えば長野県から県境を越えて、新潟県なりあるいは中津川のほうに通われている生徒さんもありますので、そこら辺との均衡等ありますので、そこも含めて、考えていかなければいけない事項であろうと感じている次第です。

(中條委員長)

ほかにご質問、ご意見がございしますか。

(小山委員)

大北地域は10年ぐらい卒業生現状維持という中で、再編がどうのこうのというより、普通科の3校を連携校として存続させながら、その中で再編を考えていくというのが、ひとつの考え方ではないかと。ここですぐに、「こことここ」という統合を決めるというのではなくて、とりあえず現状維持で10年近くはいけるということなので、その中で考えていくと

いうことはどうでしょうか。

（中條委員長）

質問ですが、連携校とはどういうイメージでおっしゃっています。

（小山委員）

各学校が、それぞれ特色あるものを生かしながらいくということなのですが、白馬なら冬のスキーとかいろいろあると思います。

（中條委員長）

いや。連携校という形態をどのように、とらえてらっしゃいますか。

（小山委員）

3校の連携。

（中條委員長）

今、小山委員がおっしゃったのは普通科3校ですから、大町、大町北、白馬この3校ですよね。

（小山委員）

はい。

（中條委員長）

この3校の連携というのは、3校をひとつの高校にして、ただ校地校舎は3つそれぞれ存続させながら、結果として現状と同じようにするというのが連携という意味なのか、将来に向けての課題を共有しながら、という連携はするが、大町は大町、北は北、白馬は白馬ということで、それぞれ3校が単独で存続するということを、前提にしながらのなんらかの連携ということをおっしゃっているのか。

連携というのは、例えばジョイント校などありますよね、という意味での形態としての連携というのはどういうイメージでおっしゃっているのかです。

（小山委員）

それは各校、大町校、北と白馬、それぞれ残しながら、10年後ぐらいをめどに、模索していくという考えです。

（中條委員長）

連携は、「枕ことば」としてあるかもしれませんが。

（小山委員）

少なくとも残しながら、その中で早急にすぐ統合するのではなくて、ということです。

(中條委員長)

いずれにしても当面普通科の3校は、統合等しないで、存続させていくということですね。

(小山委員)

そうです。

(中條委員長)

はい。わかりました。ほかにご意見ございますか。

(鈴木委員)

どこの推進委員会もそういう傾向になっているのですが、学校数の問題から議論が止まってしまうと思うのです。今4校の広域連合では、県の候補案ではひとつ減らせというのに対して、4校がこれからどういう学校づくりをしていくということをまとめはじめたのに、この取り組みに水を差すような決定、基準判断はやめていただきたいという、非常に重たい言葉だというふうに思うのです。

本当に地域に高校がなくなる、あるいは地域の高校が変わるということは、地域の場合によっては存続にもかかわったり、地域の地域づくりにもかかわってくるということから考えると、第12通学区で3校減らせと、いうことを常に頭に持ちながら、それがあつて面ではやむを得ないと、そういう議論になってしまっているということは、残念だなと思います。

私は何度もいっているのですが、「また鈴木は同じことをいっている」と、いわれてしまうかなと、思うのですが、とにかく大北は募集定員が少ない。大系線沿線の7校については、南安、北安、大町市の中学校の生徒がおおよそ1,500人いるのに対して1,000人しか規模がないということを考えると、本当に候補案にあるように、あるいは県が示したように、この第4で3校を減らすということが、いいのかどうなのかということを思ってしまうのです。

あまり長くはいいませんが、おそらく学校関係者も含めて提言が出されたということだと思ふのです。高校の校長先生も含まれていますから。という各校が、これからこういう魅力づくりでもって、この地域の高校教育を支えていくという、その意気込みがあるところへ、我々が県で課せられた1校減が、頭から離れられなくて、統合の目安を考えていくというのは、やはり残念だなと思うのです。

ある面、前回の議論の中でも、2学級増やすといつても、数からいえば3校だよというようなことだとか、あるいは2学級増やしても、かえって白馬がなくなっちゃうのではないとか。ひとつ理想をいえば、むしろ、こういう広域連合で出してくれたような、こういう地域の声、そのほかに依拠した、委員会でありたいなと思います。

「推進」ということなのですが、あくまでも「審議」ということなので、この「提言」も我々も支持をする形のまとめ方もありうるのでは。ただ前回の議論の中にもあつた、心配もあるわけです。本当にこれから4校残して、例えば今でさえ80人を割る白馬が、本当に生徒が集まるのかというのが、現実としてあるわけで。実は、平成10年に出されている、

「高校教育の改善充実」というものがあって、そこには配置の方針として小規模校については、若干厳しい言い方なのですが、2 学級校を認めてその上で、3 年連続して2 学級校が1 学級の定員を、満たないような状態になった場合には、分校化するという。こういう方針が平成 10 年に出されているのです。

その方針をある意味適用して、白馬の取り組みをやはり援助しながら、それでも地域に白馬の生徒の人数が 80 人なり、さらに 40 人も下回るような状況が続くとすれば、それは白馬は、例えば大町北高の分校化というのは、やむを得ないだろうとすれば、高校としてのクラブ活動等の保障のためには、合体させるほうがいいのではないかという判断の中で、そういう形で、我々も最終報告を書いていく、そういう方法もあるのではないか。

先ほど、提起されたように、平成 25 年までは、大北の生徒は減らないわけで、だからそういう面では、取り組みをしていく効果がある可能性を十分持っているわけで、ですからその可能性を、この我々の委員会ですら否定をしてしまうというのは、やはり取り組みに水をさす結果になってしまうかなと思います。

(今井委員)

今のふたりの委員さんの中から、こうした大北地域の生徒数は、10 年ぐらいは変わらないという、ご意見が出ておりますが、確かに数字はそうかもしれませんが、ただし生徒さんの動向は変わる可能性があるのですね。

というのは、こういう取り組みをしていくと、当然松本市内、あるいは南安の高校も、それぞれ自分のところの魅力づけというものを、真剣に考えるようになると思います。すると大町、大町北、池工、白馬高校それぞれが、魅力づけということを考えてやっていくという、前提はありますが、南安や松本市内の学校の魅力づけが、それに勝ってしまったら、さらに南安とか松本へ出て行く、思考、考え方を持つ生徒さんが増えると、いうことは十分考えられるわけであります。

結果、結局大北地域への進学者が、減ってしまうという可能性というのは、絶対否定はできないと思います。だからそれをどのように考えるかということが、一番本質的な問題かなと思います。

(中條委員長)

ほか、ご意見ありますか。

あまり、繰り返しの議論をしてもしょうがないと、私自身思います。生徒数の問題は、10 区、11 区、12 区ともほとんど 10 年間は、現状の数字で変わりません。ちょっと今手元に、すぐでないので正しい数字を申し上げられませんが、11 区でいえば、確か 27 年、28 年ごろまで変わらない。23 年ぐらいはむしろ、今よりは増えるという数字が出て来ます。

生徒数が今と変わらないのだから、今のままでいいじゃないかということに関しては、むしろ、平成 2 年をピークにということで県教委の資料をつくられているように、どれをベースにするかというのは選択の問題ですので、100 パーセントそれで満足ということはないにしても、いったんその 5.5 という、6 学級でもいいのしょうけれど、5 学級でもいいのかもしれませんが、ベースにすると今後 10 年間変わらないという、現状の生徒数で見たときにすでに高校の数が、1 学年で見ると多すぎると、6 学級、5.5 学級維持ということ

を前提にするには多すぎると、かつ山間地については、2 学級をあるいは、割るような高校もでてきてしまう。

日本全国で、文科省の資料ですから当然日本全国になるのですが、高校改革に手をつけていないのは、残り 5 県から 7 県ということで、確か第 1 回か何かに説明があったように記憶をしています。

従って、今の生徒が変わらないから何もしなくていいということではないし、統合してもしなくても過去も、我々の 20 校の全部資料をいただきましたが、魅力づけはしてきていただいているのです。

統合したから魅力づけしなくていいのではなくて、もっと魅力づけを議論していただかないといけないと思いますし地についたということかもしれませんが、逆にある意味再編案、たたき台が出たことによって、地元が、いやこれではいけない。なんとかしなきゃということで、これまでやってきた魅力づけ以上になんとかしなきゃという活動が始まったということは、ある意味皮肉的かもしれませんが、再編案効果だということで、私はすごくいいことだと思っています。

中には、名前を出してもいいのしょうけれども、辰野高校はもう本当に何年も前に、地元の中学生在が進学しない高校だということにショックを受けて、確か校長先生が変わった時期だと記憶していますが、県内の動きとは別に、自分たちとして地元の子どもたちが、進学するためにはどうしたらよいかということ、アンケートをとったりいろいろしたりして、魅力づけというのを多分 5 年、6 年前ですか、全国ニュース、全国紙にも、確か書かれたと思います。その取り組みを個別にやってきた高校もある。では、そういった高校に比べて 89 校が、本当にやってきたかという、温度差があったことは否めない。

そうしたことを踏まえたときに、魅力づけを頑張るから今のままではいいというのは、やはりそれはちょっと違うのだろう。なぜ違うかというと、これはもう何度も我々議論してきたのですが、やはり少人数の規模では、地元では子どもたちにとって将来地元に残るかもしれない、それから山を越えて都会へ出て行くかもしれない、それからもしくは日本から海を飛び越えて世界へ行くかもしれないという、子どもたちにとっていろんな機会、それは切磋琢磨（せっさたくま）であるとか、私もそうでしたが、松本に小谷とか、木曽福島から来るわけです。そうすると、いやこんなすごい奴がいるんだ。という子がいっぱいいるわけです。やはりそういう世界を知って、いやこれじゃいけない。ということで、もうあきらめる子もいるかもしれないが、頑張ってなんとかしなくてはいけないと頑張る子もいる。

そういう機会が、高校に入って初めて与えられたという意味からすると、それなりのその規模の魅力というの、これは我々が議論してきた中で、やはりそうなのだろうなということ認識しましたし、そういったものを、これからの子どもたちもやはり与えるためには、再編が目的ではなくて、魅力を与えるために、規模をある程度確保するためには、それが必要だということも我々何度も議論してきて、認識してきたことをベースに、では「具体的にどうするか」ということになると思います。

具体的にどうするかということに関しては、やはり具体的な高校名であるとか、その高校の生徒数であるとか、ということ踏まえて議論せざるを得ない。これはもう議論のステップとしては、やむを得ないというか当たり前、当然のことだと思っています。

そうしたことを踏まえてどうするか。そうした時にいったん大北地区に絞りますが、大町が4学級、10年後では4学級が3学級になります。大町北が今の3学級が2学級になります。白馬は今の2学級も維持できなくて、1学級になります。といったときに、「4校のままで10年間生徒数変わらないけどいいですよね。10年後のことは、我々推進委員会の責任ではなくて、ほかの方々に任せましょう。」ということでは、私はないと思います。少なくとも、31年まで数字は出ています。31年を見てではなくて、31年までを見て我々は、物理的な制約はあるにせよ議論し、複数案併記ではなくて、両論併記ではなくて、ある程度の付託された責任の中で方向づけをしたいと思って、確かに回数は限られるので、そういう意味での制約ということで申しわけない部分もあるのですが、私の一存で、では来年まで議論しましょうということは、第四推進委員会だけということは出来ませんので、そういう意味で申しわけないところもあるのですが、進めてきている。

それを踏まえて前回も、今いったことも皆さん頭の中に当然思い描いていただいた結果として、どうしてもその数というのは考えざるを得ないのですが、1名の反対意見がありましたが、事前にお聞きした方を含めて13名の合意を持って、個別論議をしようということの確認をさせていただいた。

これをある程度尊重しないと、我々の委員会としての議論がやはり進められない、進まないということだと私は思いますので、そういう意味で、いやそうじゃないんだという声があれば、ここで全員の合意あればまた違う進め方をしてもいいと思いますが、それでいいのであれば、今、申し上げたようなことを前提に、議論を進めさせていただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

（藤本委員）

最初に、前回の合意事項といいますが、大北地区の将来的に、4校維持は困難であると。前回の結論、これを大事にしながら討議しなければまずいと思います。やはり戻るのではなくて、せっかく時間をかけて議論してきた部分を、大事にしながらやっていかなければならないと思います。

それで、安曇地区の問題とか出たわけですが、どこの学校もこの少子化、先日の新聞によりますといよいよ日本は、人口減の時代に入るという記事があったのですが、こういう事実を踏まえて、各学校が魅力づくりをしないといけない。安曇地区の学校も、そういうことをやらないといずれはつぶれてしまう、ということを覚悟しながら、学校の魅力づくりというものを、考えていかなければならないということだというふうに思います。

今、ここに大糸線問題、大分前の委員会でも出ましたが、それにまして荒れる篠ノ井線問題というものもありましたが、なぜ地元の中学生在がその学校へ行かないかと、いうと地元の中学生は、その学校の生徒を見ているわけです。見ているとその学校が、どういう学校なのかわかる。そうすると行こうか、行くまいか迷った時に、ではどうしようかなということになると思います。

私もいろいろな高校に行っていますが、生徒を一番知っているのは、地元の皆さんなのです。地元の皆さん見ていて、この学校はいいかな、人から聞いているのではなくて、実際に体に伝わってくるものを感じてしまって、その学校を判断すると思うのですね。そういったことは私はあるのではないかと。

だから生徒指導上の問題は、学力向上といいますか、魅力ある高校の一番ベースであってこれをやらないで進むわけにはいかない。これをどういうふうにやっていくか、というのは非常に大きな問題で、これは社会的な背景が今この少子化の中で、非常に変わってきている。その中で、どうやって地域が子どもを支えていくかと、いうことは非常に重要な問題だというふうに私は思っています。そういったことを踏まえて、今回の大北地区のことに絞っているのですが、議論の審議の中で考えますと、私は、その中で大町高校と大町北高校の統合は、これはやむを得ないと思います。

これは今、いろいろなことを今日も市長さんから、大町市の取り組みのお話をいただいたわけですが、やはり地元の高校、地域は今後若い人を支えていって欲しいと思います。これは非常に大きなことでございまして、地元の皆さんが学校と連携をしながら学校と行き来して欲しいと思います。これが地域をまたいでしまうと、どうしても学校に対する地域の援助が分散してしまうというように思います。

それで、例えば大町北高校に対する、大町市の非常に大きな援助をお聞きしますと、私はそんな大きな具体的な援助をしているということは、全く知らなかったわけですが、例えば姉妹提携しているオーストリア・インスブルック市とか、アメリカ（カリフォルニア州）・メンドシーノ市、こういったところと交換交流、留学といったことを視野に入れ、文化活動の向上を目指すとありますが、これは統合してからでも出来るわけでございます。統合すればもっと大きな、大町市全体を巻き込んだ生徒に対して、こういった支援ができるわけで、ひとつの学校だけでなく、全体に対する支援が出来る。こういうことが考えられるということです。

今私は、大町、大町北高校は大変な転機である。そして新しい高校目指して、地域が一体となってこれを援助していく。そういうことをやるべきじゃないかというように私は思います。

（中條委員長）

個別案の検討に入る前に、進め方として先程、鈴木委員、今井委員からのご意見を踏まえながら、ほかにご意見があれば、よろしいですか。

では行きつ、戻りつになりますが、個別案の検討ということで、進めさせていただきたいと思います。今藤本委員からも個別案についてのご意見がでました。ほかにありましたら。

それから、小山委員からは、連携校というのは、ちょっと私はまだはっきりわからないのですが、ある意味E案というのですか、当面4校というか3校にするというような案もありましたので、これも付け加えることがあれば、付け加えて5案ということになります。

（鈴木委員）

私も、前回の議論を踏まえていないというわけではないのです、従って最終のところでは私の案をいわせてもらっているところです。4校存続だけれども、白馬について現状今までの推移を見ると、本当に単独校、独立校としてやっていくかわからないという部分があるから、一定期間の変な言い方だけれども猶予を与えて、駄目であれば、第2案でしたか、B案という書き方が、先程の広域連合から提案があったことも踏まえたうえでの、我々の

最終報告ではないかと考えているわけです。

だからいってみれば、B、E、F案。

（中條委員長）

はい。ちょっと確認します。小山委員と鈴木委員の意見を合わせてE案として、当面は4校にする。その中で白馬の単独校存続が難しければ、例えば分校化ということも改めて検討していく。ただし、現時点で決めるのではなくて、その何年後かはわかりませんが、1学級になってしまうとかいった状況を、見た段階でということで1案ということだそうです。

（宮川委員）

白馬高校という高校を心配しているわけです。私の所在地の地域高校でも同様でございます。ただ今の議論の中で、鈴木先生は何年といいましたけど、我々の推進委員会は何年という結論を出していません。今後検討するということで、統合等についてはということについては、来年にするとか再来年にするとか何も結論出していないと思うのです。

ただ、将来に向かって、どうあるべきかという議論の中で、例えば31年、皆さん31年これだけ少なくなっているといいますけど、32年もっと減るわけですね。今の県の統計によりますと、もう学校の維持どころではないような状態です。それを、見据えて私たちは検討しているわけです。ですから今の白馬高校の何とかを見て、駄目だったら分校でいいじゃないとか、大町に付けられればいいじゃないとかそういう考え方ではいけないと思うのです。本当に白馬高校、将来31年までずっと残していくその魅力は何か、本気であるのか、あれば白馬高校を地元からいかなければいけない。その時大町と大町北校はどうなるのか。そういうことになってくると思うのですね。

私は、大町、大町北校が一緒になったほうが本当にメリットだと思っています。それから、その面でもう白馬高校存続のために努力していただいて、本当に生徒がいなくなってしまった時はもう2校が統合でしょうということです、大町再編というそういう形になると思いますが、この方向でいくしかないと思います。

（中條委員長）

実施時期については、まだ我々議論していないので、次回以降それを議論したいと思います。ただ、考えるべきはという意味でいくと宮川委員がおっしゃったように、5年後を我々は考えているわけではなくて、平成31年がいいかどうかはわかりませんが、10年後、20年後、将来の子どもたちを、踏まえてどうかということを、いったん数字で我々が提示しているのは、31年までの数字しかありませんが、それを踏まえてどうかということで、今でも議論いただいております。

ほかに、ご意見がございますか。

(今井委員)

基本的に、大町市内普通科が2校あるという現状は、ちょっと将来を考えたときに難しいと思います。ですから1校に統合するということは進めなければいけないかなと思います。

ただし、白馬高校についても現状、私個人として、すでに高校としての教育が、しっかり行われているかどうかという疑問があります。多分、2クラスで、高校全体を通して6クラス、そこに配置される先生方という、多分、常に9人か10人ぐらいしかいないと思うのです。すると、やはり松本市内大規模校、昔から比べたら大規模高校でもありませんが、そういったところの先生の配置の仕方を考えると、やはり人数がいたほうがいいのかというのもそういったところも考えると、やはり高校のときに、教師から受ける影響というのは結構大きいと思うのです。そういった中で、やはり多くの先生と接して、自分が伸びるという状況もあると思いますので、基本的には、大町市内2校の統合を進めるということについて、白馬についてもやはり考えなければいけない。というのは、当面、分校化していく必要もあるのではないかと考えます。

さらに、池田工業についても、やはりちょっと考えておかなくてはいけない。というのは、やはり職業高校であればある程、広い地域から生徒を集めなくてはいけないという背景があるのです。だけど、今日配っていただいている資料を見てもわかりますが、やはり公共交通機関、松川が一番近いわけですが、駅から30分かかると、いう所在地の問題というものが、ちょっと私はひっかかっておりまして、やはりできるのであれば、もっと生徒さんが通学しやすいところへ、その機能を移すべきではないかと考えています。

ですから、もしうまくいくようであれば大町統合して1校校舎が開きます。その校舎を使って、工業科、「池田工業」という名称はなくなるかもしれませんが、機能は移転するというようなことで、生徒の利便性を測っていくということも必要じゃないか。

あるいはもっと、南のほうへ行って安曇の職業科との連携校となり、ジョイント校化ということも考えていかなくてはならないと思っています。

(宮川委員)

今、今井委員から、通学の件、所在地の件が出ましたが、池田工業は、南安から行っている数を見ますと、大体40パーセント以上来ているということは、結構魅力あるということ。そのようなことをやっておられるから、わざわざそんな不便でも行っているということです。ですから通学の問題につきましては、後先にもいろいろありますが、そのように努力をしているので、逆に、南安のほうの職業科を池田に持ってきてもいいと思うのです。その辺はちょっと数字から見ますと、かなり南から、池田高校だけですよ、大町は行っていないのですが、ですからこういうような魅力があると思えば、やはりそういうところは残して、頑張ってもらおうじゃないかと、私は思います。

今井委員からの意見のその部分については反対です。

(中條委員長)

この地図がありますが、確かに最寄り駅は信濃松川から徒歩で 30 分だそうです。池工の子どもたちは、大体自転車を松川の駅に置いておいて、徒歩で 30 分ですから自転車だったら多分 10 分程度で行けるかと思いますが、池工に通っているそうですし、それから、篠ノ井線沿線の子どもたちが、池工に行く場合は、池田町の町営バスが明科駅から、一応高校経由でという路線が、1 時間に 1 本だそうです。あるそうですので、ぐるりっと大系線へ回らずに篠ノ井線の明科から町営バスを使って、場合によっては自転車で行っても行けなくはないのかもしれませんが、篠ノ井線からはバスを使う生徒さんも、いらっしゃると思います。

それと、確か前も数字を見ながらの議論もあったと思いますが、池工は、割と 11 区というよりは、11 区から北へ上がって池工へ行く生徒はあまりいなくて、むしろ北安中心というか、大北地区出身の生徒さんが確か多かったように記憶していますが、違っていませんか。後で結構ですので、もし分かれば、分かりますか。池工は、工業科で電気・電子と建築と情報でいいのでしたっけね、3 学科編成です。

(西牧主任教育支援主事)

お答えします。池田工業高校ですが、第 11 区からは、56 名の生徒が入って来ます。それから、第 12 区からは 63 名のお子さんです。

(中條委員長)

松本方面はあまりいなかったですね。11 区といっても穂高や安曇が中心でしたね。

(西牧主任教育支援主事)

はい。

(中條委員長)

はい。すみません。そういう意味では、北、南、大北、南安も含めて、割と地元の子どもたち。ただ建築については、松本には建築学科がないので、そういう意味では第 4 通学区中では、唯一池工に建築学科あるという状況だったと思います。

(百瀬副委員長)

結論的に申しますと、委員長さんのほうで示された A 案ということですね、私は支持したいと思っております。今までいろいろな観点から、委員の皆さんからお話がありましたが、私は、「地域に学校がある、ない」そういった観点から考えていることがあるわけなのですが、歴史的に見てきますと、例えば大町市の場合でいいますと、今の町立高校というのは、かつて、明治 30 年代、松本中学の分校という形で出発をしたわけでありまして。分校というのは、4 年次には、本校へ通わなくてははいけない。当時まだ、今の町立線、信濃鉄道は開通していなかった。そういった中で、なんとしても大町に学校が欲しいと、そういうことの中でできた。そして、地域の皆さんの県立中学の設置をというのがあります。これは池田町においても同じ状況がありまして、これはこの委員会の前のときにも、お話が

あったと思いますけれども、熾烈なともいう程の大町と池田の誘致運動がありまして、その中で結局大町は、市有地を提供するとか、市の予算の大半をそれに投入した、こういったことの中で、池田町との戦いに勝ったというような、そういうような状況があったのです。そういう意味では、池田町の皆さんの思いも非常に強かったわけです。そういう意味で、やはり池田町に高等学校があるということは、非常に大事なことであります。

白馬高校でいいますと、大町北高校の分校というような形で、始まったと思います。かつては、昼間の定時制であって、組合立の白馬高校ができた当時も、昼間の定時制の学校であった。それを全日制の学校にして欲しいということで、昭和 28 年、県立の全日制の学校というこういう形になったわけです。そういった地域の皆さんの思いというものが、いずれも、学校設立の起源になっていた。

そういう意味で、特に今、白馬高校の将来というのが、非常にやはり危惧（きぐ）されているわけではありますが、第 12 区の将来の中学の卒業生の推移というものを追っていきますと、例えば白馬中学と小谷中学、これを合わせた生徒の数というのが 120 人から 130 人ぐらいで、ずっと 10 年ぐらいは推移していく。

平成 30 年代に入った向こうのほうまでは、ちょっとまだ数字がでていませんでわかりませんが、とにかく 120 人から 130 人の白馬、小谷の子どもがいるという、そういう地域に、高等学校がないというこれはやはり、そういうわけにいかないじゃないかという意味で、白馬高校を存続させるための、それなりの白馬高校としての魅力というものを、これからしっかりとつくっていただきたい。そして地元の子どもたちが白馬高校へ行こうと、こういう気持ちになってもらいたい。こういうふうに私は思うわけです。そのことがやはり地域を発展させていくということにもつながっていくわけであります。

同じ様なことが、池田町、池田の場合には工業高校ですので、地域限定ということではなくて、今も話がありましたように、南安曇からもそれから松本からも行くわけでありませけれども、いわゆる地域にとにかく学校を位置づけていくということでは、やはり池田町にも学校は必要である。大町も、もちろんそういうことでありますけど、とにかく大町から学校がなくなるというのではないわけです。

ですから、先程、藤本委員からもお話がありましたが、大町市としても、ぜひ、大町高校、大町北高校に対して今まで支援していただいたものを、ひとつにまとめていただいて、そして、大町の学校ということで、学校を盛り立てていただきたいと、こんなふうな思いを非常に強くしているわけです。

将来的にやはり、大町高校、北高校の小規模化ということは、やはり予想されることであります。いわゆる 5.5 学級とか、学校、学年の規模ですね、6 学級とかというのは、そのことが標準的な学校規模として、学年の規模として、いいという。そういった条件ができるところは、そういう方法でやってもらいたい。白馬なり、池田工業は、なかなか 6 学級といってもそれはやはり無理だと、いくら地域の皆さんが。ですからそれなりに 2 学級なり 3 学級を維持していただくように、これからの学校を盛り立ててもらいたいと、こういう気持ちを私は、非常に強く持っているわけです。以上でございます。

(中條委員長)

ほかにご意見ございますか。仮に2学級とか、3学級の普通高校となったときに、先程、今井委員のほうから、6学級とか、松本市内校でいえば7学級、8学級今あるわけです。そうした普通高校同士で比べた時に、例えば白馬というのは、専門というのでしょうか、先生が確保できるのか、できないのか。

確かに、自分自身の経験を踏まえても、田舎の小学校1クラスでしたが、ピアノが弾けない先生に音楽を、教わっていた時の音楽は大嫌いでしたし、そういう子どもたちを、やはり増やしてはいけなんでしょうし、それが物理であれ、生物であれ、化学であり、何であれ、やはりちゃんと専門の先生にきちっと教えてもらうことが、子どもたちの興味だとか、好き嫌いを含めて自分の可能性を広げてく、自分の可能性を見つけるという意味では、必要なことだと思うのです。

2学級、3学級の規模で、心配される点というのは、学校の先生方にお聞きいたしますが、どういうところが心配ですか。百瀬委員、鈴木委員いかがですか。高校として見たときに、丸山委員も気になることがあれば。

(丸山委員)

2学級、3学級のという質問ですが、例えば大町地区、白馬地区の生徒が、「僕は、サッカーがやりたいんだ」という時に、白馬高校ではサッカーできない、ではどうしても、サッカーのある大町か、北へ行きたい、ひとつのそういう世界ですね。それがよくいう規模のメリットというか、自分がやりたいものを満たしてくれるところが、たくさんあるところへ行きたいと、いうそれがひとつですね。

もうひとつは、ある程度大勢がいるところということやはり大事なことです。

ちょっと、今の議論とは外れますが、もう一度基へ返ったときに、少人数だが大事にしなければいけないことは、白馬までしか通えない子たちに、どうやってそこを確保するか、ということが必要ですね。そのためには、いずれにしてもあの校舎なり、敷地を残して何らかの形にするという、BかC案ということ、もう一度検討しなければいけないと考えています。

大町北か大町高校、それから分校というイメージが悪いのですが、何とかキャンパスとかという言い方をすると、もう少し魅力あるものをつくっていくという、そういう考え方でいかなきゃいけないのかなということで、ですがいずれにしても、規模というところと、子どもたちが学びたいためにその環境を整備してやるには、やはりある程度大きいということと、その面で、BかC案あたりということになる。

それから、そういうことを考えると、議論にちょっと今までされてなかったですが、池田工業の定時制というものについても、あの場所でもいいかなということも、もう一度考えてみる。その場所でもいいか、実際に学ぶ生徒は、半分くらいは大町の子なのです。例えば大町とか、大町北校にそれがあれば、もう少し多くの人数に応えられるか。特に定時制の場合は、通うことをよく考えた時に、そのことをちょっともう一度検討してみたいな2点です。

(中條委員長)

B案、C案に行く前に、丸山委員の私的見解で結構ですが、単独での存続ってやはり難しい、もしくは単独での存続はその規模とか見るとやはり難しい、そういうご意見の前提ですか。

(丸山委員)

はい。そうです。

(中條委員長)

はい。わかりました。

他に、いかがですか。

(百瀬副委員長)

小規模校における、教員配置の問題という点に関してですが、私もかつて、小規模校に勤務しておりまして、確かにひとりで何科目も掛け持ちをして、理科の先生といえば、物理も化学も生物も。社会科でいいますと、地理も日本史も政経も。ということでやらなくてはいけない。それから芸術でいいますと、先程委員長さんがおっしゃいましたように、専門でない先生から教わるというようなこともあります。それから音楽、美術、書道、3科目これは全部やれませんか。音楽なら音楽、美術なら美術。そういったような状況もありました。よその学校と兼務で、芸術科の先生に来ていただくとか、そういうことも、やはりあります。

そういう意味では、標準的な規模の学校、先ほどのクラブ活動もそうですけれども、やはり、非常にやはりデメリットというものは、あるわけですが、そういったその地域の事情ですね。状況というのは、だからといってその学校は、全部引き払ってと、こういうわけにもいかないという、そういうどうしようもない部分もあるわけです。ですから、私が考えているのは、白馬高校はそういうことで頑張ってもらいたいのですが、そうはいつでも状況として、やはり1学級もたないということになった場合には、それはまたその時点でやはり考えざるを得ない。

これも平成32年以降のことというのは、見えてないわけでありますので、その時点のことをまたこの数年の間に、またその数年先の人口の移動状況というのですか、そういったものもでてくると思いますので、もうすぐにこの数年のうちに、やはり第2の再編といたしますか、そういうようなことにやはり教育委員会としても、手を打ってもらわないと、これはもう遅れちゃうと、こういう気が致します。

ですから実施時期の問題については、この委員会として結論を出しておりませんので、私自身としても、すぐ平成19年度、あるいは20年度からこうやると、やったほうがいいと思っておりません。むしろ、数年は現状でいってもいいじゃないのか。しかし、そこにいつてまた考えるのでは遅いから、今の時点で、やはり方向性だけはつけておきたい。そういう観点で、発言をしているつもりであります。以上です

(中條委員長)

ほかまだご意見おありかと思いますが、今日は、長時間になりますので、皆さんお疲れだと思います。いったんここで休憩を、とらせていただきます。

【休憩後再開】

(中條委員長)

よろしいでしょうか。それでは再開をさせていただきます。

メリット、デメリットのところのC案に書いてあるのですが、20 数キロの高校間距離、JRでは確か 35 分、それも白馬駅から大町駅までで 35 分ということですが、当然そこに至るまで徒歩なり何なりで、またさらにプラスの時間がかかります。そうした距離を踏まえて、本当に統合した場合の、統合する目的は統合することによっていかに効果をあげるか、それが無いと逆に数合わせで統合するわけではありませんので、メリットなしということになります。そうした意味で専門の立場で県教委から、こうした統合のケースを踏まえた際に、どんな効果プラス、マイナス含めて考えられるかということを、少しご意見として参考にいただければと思いますが、今まではあまりそうした意見が、出ていないのでどなたか、すみませんご発言いただけますか。

(柳澤教育主幹)

はい。今白馬高校と大町北の統合ということでしょうか。

(中條委員長)

できれば一般論ではなくて、C案という意味で白馬高校と大町北高校を、統合する場合の統合効果として、県教委としてどんなことが想定されるか。県教委として検討いただいているとは思いますが、私見も含めてのご意見で結構ですので、一般論ではなくて、20 数キロ離れた白馬と大町北を仮に統合した場合、どういう効果が考えられるか、もしくは効果がないということであればないという、ご意見になりますが、いかがでしょうか。

(柳澤教育主幹)

今の白馬高校と大町北高校、ジョイント的なというようなニュアンスのC案になっているかと思いますが、やはり今委員長さんのお話にございましたように、距離の問題ということが、ひとつ大きな問題としてあるように思います。

当初お示ししました候補案の中では、両校の校地、校舎を使っただけの統合というようなケースも、ほかの地区にはございますが、いずれも距離的にはもう少し近い、近接した高校のところ考えた案になっておりますが、今のC案の場合でいいますと、やはり物理的な距離の問題と、というのが一番大きなネックになるのだろうと考えております。

それは生徒の移動、あるいは職員の移動と、そういった問題、あるいはひとつの学校になるわけでございますので、いろいろなさまざまな学校行事、あるいはクラブ活動、そういった点からしますと、やはりかなり無理のあるところがあるのではないかと考えております。

(中條委員長)

たたき台である再編案で、1 番離れている学校というのは、高校名は構いませんが、どのくらいの距離が今、県教委としての再編案の中ではあるのでしょうか。だいたい結構ですが。

(柳澤教育主幹)

6 キロぐらいかと思います。

(中條委員長)

高校名は結構ですといいながら、今第 1 通学区ですか、もめているという言い方もおかしいかもしれませんが、長野南と松代の学校間距離というのはどのくらいですか。確か議論の中で、離れすぎていて効果がないのではないかというような、これは委員会の中の議論と記憶しておりますが。

(柳澤教育主幹)

6.2 キロです。

(中條委員長)

6.2。ではこれが先ほど事務局が話したケースですね。わかりました。では、もう少しご意見いただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

(神澤委員)

私としては結局やむを得ず、A 案にならざるを得ないのかなと思います。やはり物理的にといいますか、地形的に考えても白馬は何としても残してあげたいというのが正直な気持ちです。極論をいうと、最終形では白馬、大町、大町北、最終的に 1 校になってしまうのではという懸念はされます。

しかしながらそのプロセスとすると、やはり物理的に考えれば、白馬を何とか存続させて、大町地区では 1 校減ということで大町北と大町は統合して、最悪最終的には白馬がさらに統合という、おそらくプロセスになってしまうのではと思いますが、しかしそれまでの間といいますか、その上決断するまでの間は、やはり現実には白馬以北の生徒さんたちがいるわけですので、この 41 分という物理的な時間というのは、たとえ分校にしても、非常に先生方あるいは生徒が、またそちらへ移動したり、クラブ活動というのは、非常に困難なように感じます。

白馬高校そのものを存続させることに対して、先ほど冒頭に将来のあり方についてのいろいろと不安もあるようなので、ぜひとも白馬高校をできれば存続して、魅力ある取り組みをさせていただいて、基本的には A 案の大町高校と大町北を統合していただき、白馬を残していただきたい。

それと、もうひとつ池田工業高校に関しては、職業校の問題なので、あくまでも今普通高校だけで考えての問題としておきたい。池田工業の場合は職業校としてのくくりの中として、やはりこの地区としては、基本的には存続ということで考えたいというように考えて

います。一応私としてはA案に賛成で、B案の池工の廃止ではない、存続という考え方にしたいと思うわけです。

（中條委員長）

はい、ありがとうございました。私が35分といったのは、私が見たソフトで白馬大町間を見ると、確か35分というのも出てきたのですが、時間によって違いますのですみません、ここでは41分ということですから、白馬大町間は40分ということで訂正をさせていただきます。

ほかにご意見ございましたらお願いします。

（下川委員）

今地理的な話が、白馬高校に関してありますので、ちょっと私の事情を説明させていただきたいと思います。確かに今白馬から大町までの、距離を示されておりますが、白馬高校は北にあるはずれの高校であって、特に小谷地区からは通学に関しては時間的にも経済的にも、生徒ならびに家庭の負担も多いということでもあります。

今日出された地図の中にも、小谷地区の南小谷が入っていません。たぶん推進委員の皆さん想像つかないと思うのですが、今日私も6時前から除雪をして、この会議に間に合うかどうかだったのですが、特にこういう豪雪地帯の、山間へき地ということもあるのですが、これは地理的条件でいったら、雪の降らない少ない地域とは明らかに違うところだと思います。

これは想像を絶するくらい負担が、かかっているということと、たぶんこの推進委員会が、白馬あるいは小谷で実施されていれば、もうこれは説明するまでもなく、事情が理解されるのではないかなと思います。地理的条件というところで、白馬、小谷地区の実情を、補足説明をさせていただきました。

（中條委員長）

今見ていただいている、所用時間、学校間距離というのは、これはあくまでも学校所在地として、それぞれどのくらいの距離が離れているかを、私のほうからお願いをして見ていただいたので、その高校に通う通学距離ということをお願いしていませんから、当然白馬高校の最寄り駅は、白馬ということでこの資料をつくっていただきました。そういう事情ですから、通学をまったく考慮しないとかいうことでは、一切ありませんので、ご了解いただきたいと思います。ほかにご意見ございますか。

それでは、先ほどもご意見いくつか出ていましたが、池工については、ある程度専門校ということ踏まえないと、議論ができないのではないかと。ただしそれは池工が、仮に廃止されればほかはそのままでいいということでは、決してないという前提の中で、申し上げますので、数を合わせるためにどこかを減らす、どこかは存続という前提では一切ありません。

そういう中で、大北地区における子供たちへのキャリア選択というのですか、職業、将来の進路先等の、選択肢の提供という意味での、専門校の意義というものもあるのですが、極論とは決して思いませんが、仮に大町、大町北を統合して1.2キロですか、物理的な近

さから、仮にどちらか一方の校舎を空けて、むしろそこに職業高校、専門校を持っていけば、大北地区の子供たちが、もうちょっと集まりやすいのではないかと、というようなご意見もありましたし、それから農、工、商3つをあわせるということの、本当にメリットがあるかも、よく考えないといけないわけです。

それから先ほどの、時間距離から見ていただいても、農業である南農ですね、南豊科ですか。それから穂高商業、穂高の最寄り駅間というのは、わずか3駅でよかったですかね、9分ということと、それから池工については、電車で見ればさらに穂高から北へ10数分行ってから、自転車で15分程度という時間距離になりますので、池工と穂高の物理的な距離については、その下の表で見ていただくとしても、先ほど再編案で見ても、一番遠いところで6.2キロということも踏まえながら、本当にそういう連携、ジョイント的な連携、連携というか統合ですね、効果あげられるのかということも含めて、少し大系線沿線ということで、特に職業系、専門高校に限ってもしご意見あれば、その辺も踏まえて大北地区の方向付けに、生かせると思うのですが、ご意見ございましたらお願いします。

参考までに、旧第11通学区の個別論議の、検討ポイントの3番のところにも、池工は入れてありませんが、以前の旧第11通学区の中で、穂高商業と南農のジョイント的統合があってもいいのではないかと、いうご意見もありましたものですから、それに載せていただきますので、参考にさせていただければと思います。

すみません。ちょっと覚えていないので、南農と穂高の学級数は今何学級ずつでしたか、3学級、4学級でしたか。

（柳澤教育主幹）

南農が3学級、それから穂高商業4学級です。

（中條委員長）

はい。農業科が南農3学級で、商業科穂高が4学級ということだそうです。ちなみに池工が3学級と。ご意見ございませんか。

（鈴木委員）

今までの意見を聞くと、A案がかなり進んでいるのかなと思うのですが、学校要覧を見せていただくと、私がいっていることが若干矛盾になるのを承知していいですが、というのは木曽地区の、木曽高と木曽山林高校の統合についての、意見と相違があるという意味合いで大町高校が、就職者がひとりだったということで、北高は120名ぐらいが就職するという状況から、いうならば大町高校は、進学に特化した学校になり、大町北高は多様な生徒を、教育する高校という位置づけがあって、私たちこの2つが統合することによって、本当に学校の魅力づくりというのが、きちんとできるのかどうなのかという、そのへんのところが、ちょっと心配になるのです。

果たしてこの提案にあるような、統合というような形ができるかどうかということは、議論しなければいけない部分があると思うのですが、特色がかなり異なる学校が、ひとつになることによって、その地域の高校としての魅力が、お互いに希れてしまうという、そのことを魅力づくりの位置づけということでは、議論してもというふうに感じます。

従って、A案を支持する方々にそのへんのところを、この委員会としてどう考えていけばいいのかというところを、ご発言していただいて、私自身も整理をしたいと思います。

（中條委員長）

比較論のところに書いておきましたが、そこにも書いたように、第4というより長野県で唯一の統合事例である、木曽西と東 1982 年ですか、これも少なくとも両校がまったく同じ特色を、持っていたということは決してないですよ。ただ違ってれば訂正いただきたいのですが、当時木曽東は女子校、西は既に共学になっていたはずですよ。

（鈴木委員）

共学といっても男子の方が多いと思います。

（中條委員長）

ええ。そういう高校と、共学化が既に終了して 20 年近くたっているのですか。大町と大町北は確かに、それはイコールではないにしても、木曽高が結果として、いろいろな問題があり課題があり、それを苦勞してみんなががんばってという中で、前回か前々回か木曽高の評価というものも、意見を出していただきましたが、統合がすべて悪であるということでは決してなくて、統合することによって、我々の地区には事例としてがんばって成果をあげてきた高校がある。従って、イコールだから統合しやすいとか、確かにしにくさというのではないとはいいますが、特色が違うから統合できないと、いうことではないと思いますし、逆にそういうわけを見たときに、西と東とではなぜ教育効果が上げられたのか、その辺をやはり、グッド・サンプルとしてどうとらえるかと、いうこともあっていいと思いますが、その辺はいかがなのですか。

西と東がうまくいったとして、別に A 案を支持するわけではありませんが、大町、大町北もうまいかないという、差はどこにあるのですか。そう思える差はどこにあるのですか。これは質問です。

（鈴木委員）

私の質問にも、答えてもらいたいという気持ちがあるのですが。

（中條委員長）

お聞きしたいのは、その時にいらっしゃったかどうかは別にして、木曽で間近で見ている中で、その事例を見た時にどこが違うか。それで、それがどういう前提で先ほどの鈴木委員の発言につながっているか、ぜひ教えてくださいということです。

（鈴木委員）

木曽高においても、かなり多様な生徒が入っていると思うのです。ただ私などは大まかに分析をすれば、理数科を設置した段階で、木曽郡の生徒のかなりトップレベルの子が中学校から集まれる時代になったということでしょう、進学実績を上げやすい環境であると思います。

だけでも、一方では生徒指導的な課題も片方でやはりある。それはたぶん松本市内校でも同じような状態があると思うのですが、それよりももう少し幅の広い課題は、実態調査が必要であると思います。私が自身の整理のために、意見をいただきたいということを。

（中條委員長）

それはわかります。それはわかりませんが、はい。

（百瀬委員）

いいですか。

（中條委員長）

百瀬委員。要は、鈴木委員のご質問に対するご意見ということですよ。お願いします。

（百瀬副委員長）

今木曽高校と大町高校の、進路指導の問題を学校でもって見ますと、大町北高校も大半は進学をしているわけですね。大学、短大、それから専修学校、各種学校、そして就職が20人ほど。木曽高校のほうも大学、短大、専修学校、それから就職が16年度の場合6人、それから浪人ほかで全部で18人と、このような数字が出ております。

ですので、大町北高校という進学校ではないというようなニュアンスもあるようですが、大町北高校の卒業生は、大半は進学をするわけですね。木曽高校は確かに理数科もありますので、その辺が北高とは違うと。統合ということで、大町と大町北高がした場合、大町には理数科があるわけですからね。ですから、そういう意味では鈴木先生が心配されるようなことでは、ちょっと私は理解できないという気がするのです。

（小林委員）

今まで出ている意見と、同じかもしれませんが、地域の活性化ということを考えたり、地域を育てる、白馬からの地域を守っていくということから考えた場合に、それぞれの地域に高校ほしいということは、当然だと思います。従いまして、大北の白馬高校や大町、池田工と、それぞれ存続したいということなのです。ただ今出ている中で、大町高校と北高校の統合のことについては、私は今まで出ている意見と同じように、統合という形で考えたらどうかと思っております。

それぞれ先ほどお話もいただいて、大町高校の将来のあり方だとか、あるいは大町北高校の将来のあり方ということについては、説明をいただきましたが、それぞれの魅力あるところをお互い共有して、ひとつの方向、総合した場合どんな魅力づくりをして、生徒を集めるか。あるいはその地域を育てていくか。そのようなことをしっかりと論議して、そして統合というような形にもっていったらどうかということを思います。

従いまして、今すぐここでもって結論を出すということではなくて、そういう方向にこれから進めていくということで、地域はもちろん、教育委員会にもなりますか、あるいはこの推進委員会になるか、魅力づくりについて十分に、統合した場合の魅力、どういう魅力をつくっていったらいいかということ、十分に検討してやっていったらどうかと思い

ます。

（小口委員）

私はやっぱり白馬高校はどうしても、2 クラス現状でも非常に厳しいと思います。よくいえば魅力をつくって教えていくのも、現実にはなかなか難しいかなという気がいたしますので、この中から選ぶとすれば、むしろ私はB案でやったほうがいいのかなという気がします。先ほどもいわれた過去の歴史も踏まえる中で。

私は大北地域は、木曽よりもその辺の合意形成が、遅れていたことは確かだと思います。地域課題として。かつその地域もバランスが、よく推進してきた地域だなということが。

やっとここへきて、地域の中において議論が、高まっているのであれば、当然委員長の意向に反するかもしれませんが、両論併記でもやむを得ないと考えがだんだんとしてきたのですが、いけませんか。大北の皆さんが、4 校存続をオンリーワンで考えていらっしゃらないということですね、その地域の事情を聞く中で、もっと議論を高めていただくことも、選択肢としてあったらいいのではないかと思います。

私たちはあくまで実施時期を、必ず 19 年の 4 月からという、固定したことをいっていないという議論を、前提にしておりますので、そうであるならば、さっきの文書にありました、地域がやっと議論を始めたのに、その水をさすようなことということに非常に理解できるものがあるものですから。私は個人的にはB案ですが、Bの併記でもいいのではないかという気がします。

（中條委員長）

結論づけが、ある程度物理的に制約が、ないということではないので、我々がどんなにがんばっても結論づけができなければ、それは何も書かないということではなくて、それまでの議論を踏まえて記述するしかない。そういう意味では、2 案が出れば 2 案でしょうし、3 案が出れば 3 案を書くしかない、ということだと思いますが。ただ最初からそれを前提にするかというのは、この中で合意形成さえあれば、それはまたそういうことだと思います。

今おっしゃられたのは、最初のほうに小山委員と鈴木委員の意見まとめて、A、B、C、DのEとして、当面は4校を維持すると。それで白馬の状況を踏まえて、B案的な存続について分校というようなことも、やむなしということを検討するというのを、つけ加えてほしいということでしたので、いったんそれを仮に入れるとして、今のご意見はそれに包含される、もしくはC、D今のEも全部カットして、A、Bのいずれかということのを地元の議論踏まえて、結論を出してもらおうということを一応あげるべきと、そういうことですか。なるほど。ほかにご意見ございますか。

（宮川委員）

「当面の」という意味は、すごく魅惑的な意味ですよ。基本的にいえば、例えば実施計画3年ぐらいだったら当面ですし、それから10年だったら長期計画になるのですが、今の話になると、我々が27年でも25年でも、というまだ日にちを決めていなものですから。そんな意味で、ここまでは4校維持は、ずっと当面なんですよ。だからそのものを、魅力

を抱えているということなので、非常にその点があいまいになってしまうのではないかと思います。

（中條委員長）

わかりました。ほかにご意見ございますか。

（野口委員）

白馬高校について、小規模化してしまって教員の配置が心配されてくるような形がありました。それから先ほど、連携という中で同じ県の職員であるのですが、教員の連携という形をとれば、やっているという形も取れるのではないかと思います。

それから私の場合同じ地域の中に普通高校があるということで、やはり地域の中にあってやっていけるということであれば、いいと思います。

（中條委員長）

ちょっと確認します。野口委員自身は、A案で、白馬については教員連携ということを考えながら、単独校としても先生方が、さっきの専門の先生方が確保できるようなプランを、考えられるのではないかと、ご意見でいいのですよね。それは形態とは別にそういうことは、ありえないのかもしれませんが、通常一般的に上はジョイント校だとか統合だとは別に、単独校の小規模校に対する、教員確保というのでしょうか、例えばここでいう白馬が、仮に単独校で存在した場合に、大町高校の先生が両方を兼務するということが、ありえるのかどうかという観点からご意見を。

（篠原教育幹）

基本的に現在もそうですが、小規模高校にはある程度の加配これをする、せざるを得ない、そういう状況はございます。

それからもう1点ですが、これは兼務ということですが、できるだけ兼務を抑えてきているというのが、これは兼務の場合は、例えば月曜日から金曜日まで5日間ございますが、この5日間を例えば2日はA校、3日はB校とこのようなことになると、結局クラス担任が非常に持ちづらいということがあります。やはり月曜日から金曜日まで生徒は一貫して、その高校にいるわけですから、生徒に対する指導の密度といえますか、そういったものにも影響が、出てくると思います。

ですから、別の形をとった、いわゆる教育の自立、そういうことは考えていくと、いうことが必要になるということです。

（中條委員長）

別の形という、具体的な意味は何かありますか。

（篠原教育幹）

先ほども申し上げましたとおり、例えば加配ということを考えてということです。

(中條委員長)

わかりました。キャンパスみたいな言い方もありましたが、統合して両方の校舎を生かすという中では、同じひとつの高校ですから、両方の校舎でひとりの先生が、同じ物理を教えるということはあると。月曜日から何曜日まではということは、あっていいということですね。

(吉江高校教育課長)

今お話ございましたのが、いわゆる私どものほうの提案でいきますと、ジョイント高校というようなイメージかと思っています。ジョイント高校につきましては、最終報告の中でも、近接する学校という位置づけになっていまして、近接する学校において、生徒も先生も行き来できるということも、ひとつのメリットとして考えております。

それでやはりある程度の、先ほど申し上げた、兼務も含めてなのですが、ある程度の距離が離れてきますと、現実問題としましては、生徒さんのそれぞれの校舎を、行き来するというのは、正直申し上げて無理だと思います。

それと、教員のほうも不可能だとは申し上げませんが、現実的には非常に厳しい問題ございまして、先ほど申し上げたような日にちを、区切ってということだと、本務がどっちだという位置づけはいたしますが、どうしても自分が本来、いろいろな教科指導に限らず、いろいろな指導をする事自体が、本来どちらの学校かということで、非常に中途半端になってしまうということの中から、できうれば基本的には、先ほども申し上げましたように、兼務という形態もあまり増やしたくないという、前提で考えております。

やはり連携というようなお話も、先ほど来出てはありましたが、仮に連携ということも、本当に効果的な形を考えるのであれば、ある程度の近接のところ、そうでなければ名前が連携という形の中で、では連携という効果を、どうやって生み出すかということになりますと、夏休みか何かを利用しての、総合的な行事とかそういうことをやるとか、というような位置づけをしていくしか、ほかにはなかなか見出せないのかなと、考えている次第です。

(中條委員長)

そうすると、単独の小規模校については、ある程度これまでの教員配置に関しては、配慮してきているとすれば、私は前聞いたときに、加えるとそれから廃止するの、「かはい」だと思って「加廃」と書いたら、そうじゃなくて配るほうの、プラスに配るという意味での「加配」だという、お話だったのですが、そういう意味で通常の学級数から見ての、教員数よりも多く配置をすると、いうことをするという前提ですよ。

それからジョイント校であれば、近接を前提にしてジョイント校であれば、要は生徒なり先生方の行き来が、可能という前提の中で両方で教えるということは、あり得るが、それが逆に物理的に、時間それから距離的に無理だということであれば、そういったこともあまり考えられないと。かつ、高校をまたがっての兼務ということはこれまでもあまり方向としては、やってきていないという前提でよろしいですか。

(吉江高校教育課長)

今お話ございました、加配の関係だけちょっと、補足させていただきたいと思います。加えるに配分の配、配置するということで「加配」と申しておりますが、基本的に、これは議論の方向もそうですが、教員の総数というようなものが、県全体としての総数というものがまず決まります。それで決まる中で、やりくりとしての、加配をしているという位置づけになります。

ですから例えばの話が、小規模校の場合には、やりくりをして加配をしているということでございますので、結果的に県全体の数は決まっておりますから、表現がいいか悪いかはさておいて、ある一部のところからその先生の数をもってきて、配置しているということでの加配だということで、まずご理解いただきたいと思います。

それ以外の点については、今委員長さんがおっしゃられたとおりという形で、けっこうかと思っております。

(中條委員長)

ありがとうございました。先ほど、鈴木委員から、大町と北を統合するという案に対して、どういうメリットがあるかと、いうのをぜひ委員の方々からいただければと、いうことでありましたが、そういう観点から、ほかにご意見があれば。

確認しますが、県の再編案は大町と大町北高校を統合すると、なっていて、この場合に普通学級数等々を踏まえて、大町高校の校地、校舎を統合高校として使うという、前提でよろしいわけですね。従って、2つの校地、校舎、2つのキャンパスがあるような形の、統合ではないということですので、よろしくお願いします。

ほかにご意見ございましたらお願いします。

(小山委員)

先ほどの大町高校と大町北高校の統合についての、ことについても大町校と大町北校が統合した場合に、クラスが増えても、北校へ進学希望していた生徒たちは、全員は行けなくなると思うのです。やはり大町高校は進学校ということで、先ほど北校も進学校という話も出ましたが、一般的にいわれる進学校ではないと思います。その点で統合した場合、北高へ希望してきた生徒さんたちが、普通科高校の希望が多いということから、ではどこへ行けばいいかと考えたときに、近くには、白馬という高校もありますが、ちょっとない状態だという気がするのです。

(中條委員長)

それはA案の、デメリットとして理解すればよろしいですね。

(小山委員)

はい。

(中條委員長)

ほかにご意見ございますか。

(藤本委員)

大町と大町北高校の統合ということを考えたときに、私は一番考えなければいけない問題としては、両校の校風の違いというか、そういったものをどのようにしていくかというだと思っています。もうひとつは学力差の問題を、どういうふうに乗り越えていくかと、ということだと私は思います。

例えば先ほど大北地域、4 高校関係者会議の中に、大町北高校の将来がという中で、地域高校として地域との連携を考えた中でコミュニティ・スクールを目指すということは、大町北高校が3 学級というよりも、地域として7 学級に対して、支援していただいたほうがより強力な支援活動になると思うのです。例えば地域との連携を図るということだって、その地域に大きな高校があれば、大勢の生徒がそのメリットを受けることができる。そういう意味で統合はメリットであると思うのですが、伝統の違いをどういうふうに、考えていくのかという問題があると思います。

私は前にちょっとお話ししたのですが、昭和 52 年に大町高校へ教員として赴任しました。その時に、その時の生徒会長、名前覚えていますが、生徒会長が大町高校には制服があると、松本市内には制服がない。大町高校に制服があるということは、大町高校の生徒の気概を示すものだ、質実剛健の校風を、我々は維持していくんだということを、あの時に高らかに話したのを私は覚えているのです。そういった校風をどのようにしたら良いか、大町北高校には大町北高校の校風があると思うのですが、そういうものをどうやっていったらいいかという、不安があるのではないかなと思います。

もうひとつはそういった1 校になることによって、より学力差が拡大してしまうのではないかと、それをどうしたらいいかということがあると思うのですが、提案には特進クラスですね、理系特進クラス、文系特進クラスというような話がありました。私は理数科を設置した高校に、勤めたことあるのですが、理数科にいったん入った生徒~~が~~でも、文系にいきたいという生徒がいるわけです。私が勤めた高校では具体的には2 割ぐらいいたと思います。中学から理数科選んで入ってもそういった生徒がいる。そういった生徒にどういうふうに対応していくかというのは理数科の魅力づくりの中の、ひとつの大きな問題でございまして、例えば理数科を2 学級にしてしまおうとか、そうすればそういったものに対する、対応がとりやすいといいます。この他にもいろいろなやり方があると思うのです。

そういったふうにして、学校の魅力づくりというものを、制度的な面で何とかカバーしていく、そして大きな人数で行える、そういった生徒会活動とか、あるいはこういった特色ある学校のほうを、より強力に進めていくと、そういうことに地域が援助していくというような形で、新しくこういった魅力づくりを地域ぐるみでやっていただければ、本当にありがたいなと、このように思っているところでございます。

(中條委員長)

場合によっては習熟度別ということも、あるかもしれませんね。理数科などに分けずに、普通科の中で習熟度別コースというのもありえませんか。

(藤本委員)

私見ですが、私は新しい学科をつくるべきだと思っております。だから入ってからわかるのではなく、新しい学科をつくと、そういうふうを考えております。

(中條委員長)

先ほどの小山委員のご意見で、A案のデメリットのところの一番最後に、アンダーライン二重線を引いてありますが、提言を踏まえてという言い方になってはいけないかもしれませんが、必要があれば、学級増ということを考えてもいいと思うのです。

ただ学級増を考えたときに、小山委員から統合した場合に、これまで大町北に入られた子どもたちが、大町、大町北が例えばひとつの7学級の新高校になったときに、ニュアンスは大町に入れなくて、仮にほかへ行っていた子どもたちが入ったことによって、今大町北に入れている子どもたちが、本当に全員入れるようになるのかということが、心配だというご意見だったと思うのです。

それに対して、仮に学級増すればどうなるのかということで、もしかしたらそんなに差があるかどうかちょっと私もよくわかりませんが、南に下った子どもたちが例えば40人規模で豊科とか行っていますから、その子たちが戻ってくる可能性があるとは思いますが、逆に白馬から佐野坂超えの子どもたちが、もっと上に行く可能性もあると思うのです。ですから、そこをA案でいったときの個人的にはちょっと心配なところ です。

それはそれで魅力がないと地元の子も子どもたちが、来てもらえないということでは、提言にもありましたが、逆に行かなきゃ損だというぐらいの中高連携をして、連携の中で120分の80、少なくとも3分の2くらいは、「行かなきゃ損だ」くらいの魅力づけをすることを、していくべきだと思います。

ほかにご意見ございますか。よろしいですか。決して拙速の議論をしているつもりはありませんが、もしご意見がないということであれば、ある程度ご意見は出していただいておりますが、一応ちょっとまとめとして、お手元にある比較表で見ていただければと思います。一応これまで、当初お配りしたA、B、C、Dにプラスして、2つでいいですかね、意見が出されました。一応確認させていただきます。

A案は、大町高校と大町北高校を統合すると、これは県教委のたたき台であり再編案どおりの内容です。それからB案は、白馬高校を大町北高校の分校とすると、これの前提は、白馬そのものが現状を踏まえて、将来的に存続不能という前提です。C案は、白馬高校と大町北高校を統合すると、個人的に名称は、ただしで書いてありますが白馬高校にしたかどうかということですが、これは無視していただいて結構です。D案は、南安の専門校との統合を踏まえて、いったん池工そのものを廃止をして、専門校としての統合を考えるとというのがD案。それからE案は、当面大北地区4校でいいですかね、普通科3校ですか、4校でいいですか。当面4校を維持して将来的に白馬の状況をみて、その段階で、分校化を検討すると、検討して決めるということですかね。F案は、地元の結論に委ねるという前提でA案、B案の両方を、我々として最終報告に盛り込むと、結論付けをしないということの6案。だと思っておりますが、これ以外に案として、ご意見ございますか。よろしいですか、はい。

それでは、既に発言いただいておりますので、これまで発言いただいたもので、補足の説

明なしということであれば、ちょっとEとFが、分かりづらいかもしれませんが、AからFまでの中で、ご自身は、「どれを」ということの意味表示をしていただければ結構ですし、もしご発言がまだ、もしくは補足があって、選択をしたその説明が必要だという方については、簡潔に選択理由をご説明いただければと思います。ということで、手を挙げてということではなくて、おひとりずつご意見を伺っていきたいと思いますが、そういう進め方でよろしいですか。いいですか。反対はございませんか。はい。それでは、これも大体順番にということになってしまいますので、恐縮ですが、あいいうえお順じゃないですね。では後ろからいきますかね。

(小口委員)

さっき申し上げました。

F案です。

(宮川委員)

私はA案です。

(百瀬副委員長)

私も、A案です。

(小林委員)

A案です。

(神澤委員)

A案です。

(今井委員)

基本的にA案で賛成です。ただし今後、白馬高校の存続については、かなりどこかポイントを決める、例えば10年後なら10年後のところについて、きちっと最終案を考えた意見とするというような、ただし書きを付けておいたほうがいいと思います。

(野口委員)

A案でお願いします。白馬の魅力付けを考えていく必要性があると思います。

(小山委員)

私は一応E案ですが、白馬校に限ってというニュアンスではないです。

(中條委員長)

それはすいません、私のほうで鈴木委員の意見を踏まえて付け足しました。

(小山委員)

白馬校に限って分校化ということじゃなくて、4 校合わせて考えていく、大きく分ければE 案ということになります。

(下川委員)

私はA 案であると思います。今まで過去から統合、存続というようなことだけでやってきたわけではないので、もちろん第 1 次、2 次再編ということも踏まえて考えてきておりますので、十分承知しております。

(丸山委員)

白馬のことを考えたときに、C を大事にしながら、B 案をとという方向をと考えています。

(中條委員長)

ちょっと待ってください。C を大事にしながら、結論はB 案ですか。

(丸山委員)

はい。

(藤本委員)

A 案をお願いします。

(長谷川委員)

私は、当面しばらくの様子を見なければいけないところがあるのかなと、いう気がするので、一応E 案をお願いします。

(鈴木委員)

E 案です。

(中條委員長)

私自身は、C 案です。

ということで、14 名のご意見をいただきました。A 案に関して、ご賛同いただいた方が 8 名ですね。B 案が 1 名、それから C 案が 1 名、D 案はゼロ、それから E 案が多少の補足等ございますし、ニュアンスがちょっと違うよというご意見もございましたが、一応分類上 E 案ということでは 3 名、それから F 案が 1 名ということです。

前回は踏まえ、それから今回の議論の中で、我々第四推進委員会としては、方向性として大町高校と大町北高校を統合すると、あと統合効果といいますか、それをどう考えるかというところは、十分に我々としても最終報告に向けて、さらに煮詰めるところがあれば煮詰めていきたいと思いますが、一応 A 案を前提に最終報告に結び付けたいということで、確認をいただけたということになります。

それでは時間も限られているので、ちょっと最後までいけないかもしれませんが、今の

専門高校の在り方という中で、南安、松塩旧第 11 通学区の検討ポイントを、少し見ていただきたいと思います。

まず 11 区については、前回の議論がございました。本当は少し前回議論のポイントを振り返りたいのですが、ちょっと口早にいきますので申し訳ありません。

第 11 区については、第 10 回ですね、10 月 7 日に議論をしています。再編そのものについてのご意見は、200 名を超える生徒が公立に行けない現状であり、キャパが小さすぎるということ。それから専門校 2 校に対し、普通校が 1 校では少ないということ。これは大系線沿線ということで、南安についてのご意見です。

それから 2 番目として、筑摩の多部制・単位制高への転換について議論をしました。全日制の子どもたちは、そのまま卒業することになるが、学校行事を多部と合同で実施するなど、全日の子どもたちに、支障のないように工夫していくという県教委の回答がなされました。

それから定時制で統合される松工の扱いについては、今の工業科の実数は確か 13 名だったと思いますが、そのまま工業科で卒業し、実施年度からは松工としての定時制募集は停止され、多部制・単位制に変わる筑摩として募集をするということになります。その中で多部制・単位制の持って行き方によっては、確か静岡でしたか、進学校化や、人気校化により、行きたくても行けなくなる可能性があるということ。それから少人数でのきめ細かな指導という、現在の定時制の良さを継続すべきというご意見がございました。県教委からは、現在でも学級数より多いコース制を取って、20 人、30 人規模で指導しているケースもありますという説明もございました。

それから、もう 1 回南安の高校についてということで、南安が動きやすいメリットがあると、キャパの問題、地元の高校に行かないのはキャパだけではなくて、むしろ魅力のある高校であるかどうかの問題。生徒数、学級数でいった数字ではなく、魅力の論議をすべき。それから専門校の在り方を再考すべき、農業も営的知識が必要なはずであり、比較的近いので商業高校と、ジョイント校化したらどうかというご意見。それから普通高校が少ないので、その分 1 校普通高校を新設したらどうかというご意見。それから O B や地元には、高校名に愛着があるので、簡単に高校名変更等、もしくはジョイントをするべきではないというご意見がございました。

それから中学卒業時ではなく、普通高校の 3 年間での進路選択というニーズが高まっているのでは、そのために普通科のウエイトをある程度、増やすべきではないかというご意見です。松本地区の全日制削減で、3 学級ありますが、これを南安に配分すべきだとか。専門校の拠点校化をして、1 校しかない農業高校の充実も考える必要がある。普通高校は座学のみだが、専門高校には実習もあり、魅力を感じる生徒もいる。ただ現状は、専門科目の内容が、世間が求めるのと合致しているのか、ミスマッチもあるのではないかと、どこまで柔軟に対応が取れるのか、キーになろうと。工業高校の専門科目の教員確保は可能かという質問があり、これは県教委から現状可能ですと、いうお答えがございました。というところが前回の議論です。

それから残念ながら都市部高校についても、一応検討ポイントとして挙げてございますが、都市部高校については、個々に特徴もあり、現状で特段の変更なしと。歴史経過、公私のバランスを考える必要があるんじゃないかということで、あまりご意見はござ

いませんでした。というのが、第9回の推進委員会で、南安松塩、旧第11通学区の議論しております。それを踏まえてお手元の検討ポイントにまとめております。

まず、再編そのものについては、学級数、生徒数は当面減少はないと、特に第4通学区の中では減少率でみると、一番11区が少ないということになります。それからこの地区については、松本筑摩の多部・単位制移行に伴いまして、全日制が廃止をされます。現在3学級が全日で普通科がございますが、これが廃止ということで。そういう意味で、数でいえば、県教委のカウント上は、松本筑摩全日制廃止に伴なって、1校削減ということでカウントもされている状況です。

ということを踏まえて、一応前回は全日制的廃止、それから松工の定時制の筑摩、多部・単位制高校に移行に伴う、松工定時制の統合とうところが一応確認された内容です。ここには触れておりませんが、総合学科については、志学館が現状県内唯一の総合学科高校になりますが、この状況、現状どうか、それから転換後でいいですかね、状況等々のご説明いただいた中で、現状6学級の志学館については、そのまま総合学科、総合高校として、各地区1校ずつ設置が案として盛り込まれているものについて、第四推進委員会はそのま塩尻志学館を、さらに拡充させていくことでいいのではないかということの、確認をいただいたというものが、これまでの我々の議論、もしくは合意内容になります。

それを踏まえて大北を含めて2番目として全日制廃止で、当面全体としては生徒数が変わらないという意味は、学級数が変わらないということにつながるわけですが、3学級、削減される3学級をどこにどう配分していくか、最終的には県教委の事務作業ということになるかもしれませんが、我々として意見があれば出していく必要があると、要望として盛り込んでいく必要があると思います。

それから3番目として大系線沿線ということで、先ほどから議論が出ておりますが、普通科ウエイト、それから職業科ウエイト等々を考えたときに、将来の、平成15年のアンケートをベースにした、それだけで持ってくるというリスクは重々承知の上で、それを見たときのニーズ等から現状4学級、3学級の商、農がそれぞれがさらに生徒減にともなって、学級数を減らしていったときのリスクを踏まえて、ジョイントしたらどうかというご意見。それからそこに書いてある、大系線という話がありましたが、個人的には篠ノ井線は大丈夫かという気がしてしまっていて、そういう意味で今のままでいいのかということ。それから都市部校についても、皆が金太郎あめになっていいのかということで、多少暴論であります、あくまでサンプルとして入れてありますので、この辺を踏まえながら、焦点絞るなら絞りますので、ご意見をいただければと思います。

どうしましょう、いったん、先に3番からでよろしいですかね。これまでの、今日の議論の続きの中で、専門校の扱いをどうするか、それにともなって、全体の学級数を踏まえて、廃止分を含めた、普職ウエイトというのでしょうか、普通科のウエイトを、どうすべきかということで、また戻ってくるかもしれませんが、ということで3番の大系線沿線で池工も含めて、選択の幅という意味で、どういうことが考えられるかということも、これまでの議論を頭に入れて、ここについてご意見があればいただきたいと思います。

(今井委員)

間近で見えていますと、まとめのところにもありますが、やはり大系線沿線、すぐ近くのところに農業科と商業科がそれぞれまとめて、専門科ではありますが2校存在しているというのは、現状の生徒の進学希望のことを考えて見ても、ちょっと多いかなと思っております。

例えば安曇の中心部、豊科、穂高そういったところから、本当に手軽にどこかへ行こうと思ったときに、現状は豊科しかないというところは、ある程度解決しなければいけないと思います。確かに安曇野市といいますと、もうひとつ明科高校があるのですが、ちょっと現状、今日の地図を見ますと、明科駅から明科まで10分と書いてありますが、私は高校というものは、ほとんど自分で歩いていまして、明科の駅から明科高校まではとても10分では歩けない。というようなこともあって、多分明科というところの魅力というものについて、何か考えていかないといけないなと思っています。いずれにしても、農業科と商業科をひとつの専門科高校にして、例えば穂高商業を普通科に変えていくとか、というような取り組みはしていったほうがいいのではないかと思います。

現状は、やはり農業科というところが、これから結構単独で存続できるのかなと、逆に1校存続をさせることによって、取りあえず近くにある高校で、入れそうな学校があるから、そこに行こうかというような形になると、やはり魅力ある高校どころじゃなくなって、俗にいう「荒れる大系線」をさらに助長するような結果になるのではないかと考えていますので、農業科の希望観というものは、やはり考えていったほうがいいという思いがしています。穂高商業と農業科、南農ですね、そこをひとつ統合して、ひとつの学校を普通科にしていく、その普通科で今回筑摩の3クラス普通科減というところにも対応するというふうな考え方でいったらいいのではないかと思います。

(中條委員長)

この時間距離が明科高校の学校要覧に、徒歩10分と書いてあるそうでして、ちなみに大町北も20分かからないんじゃないかと、いうご意見もあったんですが、これも学校要覧に20分と書いてあるそうですので、ではそれを尊重しましょうということで、一応これを全部つくってきました。そういうことだそうです。

どのくらい離れているのですかね。

(今井委員)

多分20分かかると思います。

(中條委員長)

20分ですか、分かりました。

(今井委員)

穂高商業は、10分はかからない。

(中條委員長)

はい。大体のイメージを見ていただきたいと思います。ほかにご意見ございますか。

今の今井委員のご発言で、ちょっと検討ポイントの3に触れておいたのですが、穂高と仮に南農をジョイントしたときに、確かにカウント上は1校減るので、校地、校舎もひとつに仮にもっていったときに、残ったところを使って、普通高校を新設ということを考えていけないかというご意見でしたが、これに対しては、今お話にもありましたし、穂高それから確かに通学の路線は違うのですが、明科に4学級あります。それから大北の4校の提言にもありましたが、南へ流れるということ、あくまでも個々の魅力付けをして、流れなくするという意味でのキャパとして、ある程度普通科ウエイトをもう少し増やさないかということで、場合によったらそれを大町方面へ振った場合は、どうなるかということですね。その辺も絡めながら、本当に専門校と普通科のウエイトをみたときに、普通科高校に転換したほうがいいと、いうご意見ですが、それが本当に現実的かどうかも含めてほかの方からも、ご意見をいただければと思います。

(藤本委員)

普通科高校といわゆる専門学科の高校の一番の違いは、専門学科の場合はいろいろ資格が取れると、例えばワープロ検定とかですね、あるいは農業科の場合もいろいろな資格が取れると。それで、今学校要覧を見たのですが、その辺のどのぐらいの生徒が、こういった資格を取っているかは、見えないのですが、もしそういったことが県教委のほうでわかれば、例えば穂高商業では、どんな検定にどれぐらい受かっているか、南安曇農業高校では、どれぐらい受かっているということを、教えていただければありがたいと思います。池工についてもお願いします。

(中條委員長)

資料がすぐ出ますか。

(柳澤教育主幹)

今、ただちには、それぞれの学校のは出ませんので、もし必要とあれば次回お出しします。

(中條委員長)

考えられる資格としては、どんなものがありますか。商業科は今お話があった、ワープロとか、それから秘書検定もそうですかね。簿記もそうですね。それから農業科の資格は何かありますか。

(柳澤教育主幹)

いろいろ考えられていますけれど、大型機械ですとか、あるいは毒劇物ですとか、園芸科であると玉掛けなど、いろんなそれぞれの学科に応じて、それぞれ学校の特色を出しながらということもあるかと思います。

(中條委員長)

工業高校はどうですか。技能検定はちょっと無理ですよ、あれは実務経験が確かいるような気がしましたが。

(柳澤教育主幹)

例えば特別小型フォークリフト、危険物取扱者、毒劇物ですね、ボイラー技士、測量士、測量士補、トレース検定や登記実務検定とかワープロ、情報処理関係、商業系でも商業経済とか、簿記はもちろん、販売士検定や、ビジネスコンピューティングとかいろいろな資格があるようでございます。

(中條委員長)

実態については、すみませんが次回にお持ちいただくということで、あと池工の建築科は、2級建築士とかそういう資格になるのでしょうか、資格取得されていると思いますので、お調べいただきたいと思います。ほかにご意見ございますか。

(百瀬副委員長)

普通科の学科を増設したらというような話が、ありましたけれども、ちょっと外れるかもしれませんが、明科高校、現在普通科4学級ということで、明科高校の普通科へ現在通っている生徒の状況を、学校要覧で見ますと、南安曇郡は、南安曇がなくなりましたので、こんど安曇野市ですか、200人になるんですね。子どもが447人のうち安曇野市から大体200、それから東筑といいまして、筑北、そして明科、明科高校は、主として東と北のほう101人、100人ですね。それから松本市と塩尻市を合わせますと、波田中学なども含めて、ようするに南部ですね。明科よりも南のほうの松本とか、塩尻、波田、鉢盛をその辺を合わせますと230ぐらいなんですね。そして大北が25ですね。そうしますと非常に南のほうからですね、明科のこういうような状況。私も実は初めてそういう認識をしたのですが、学年ごとの数字をみていると、よく見えないんですけども、3学年を全部まとめてトータルしてみますと、そんな数字が見えてきまして、そんなに南のほうから通学しているのだという認識を新たにしたのでございます。

普通科という観点でいいますと、数の面からいいますと、もう少し南のほうに普通科の学校があってもいいのではないかと、あるいは学級総数といいますかね、そういうような気がするんですね。逆にいいますと、明科高校は450人近くのうち、今北のほうから100人ぐらいしかない、非常に少ない。ですから将来的にやはり明科高校をもり立てていくためには、安曇野市を含めて北部、東筑のほうからの生徒にやはり進学してもらって、そういった高校づくりというものを進めていく必要があると、こんなふうに思います。

今の状況だと、非常に、明科高校の将来というのが明るい展望は見えない、そういった部分があるということに関しては、ひとつに明科高校の例をいいますが、その辺も考えていかないと、普通科の増設には非常に不安な部分もあるというふうに私は思います。

(中條委員長)

ありがとうございました。それでは専門校ないしは、それに伴う普通科、普通高校は別にして、普通科学級の観点も含めてご意見があればいただければと思います。

(今井委員)

現状の、確か南安曇から明科高校へ通学する生徒が多いのです、どうしてそこを選択するかというと、どうしても明科が松本市内の普通科未満なんですね。それで普通科へ行きたいが、では豊科であれば行かれるかというと、そこまで行けなくて結局、明科まで行くという選択もしているという、南安に行っている子は現実が多い。なおかつ、大変気の毒だなと思っているのは、公共交通機関が明科まで行っていないのです。ですから現実には豊科から明科までは、大体自転車で行っている。自転車で行くと小一時間掛かるぐらいの距離を、毎日通学しているという現状をみても、やはり大糸線沿線であれば、そういった過度の負担をしなくて、もっと通学に要する時間を、有意義な時間の使い方に変わっていかなければという子が、あまりにも多くすぎるんじゃないかと、いう認識を持っていますので、その辺をちょっと検討していただければありがたいなと思います。

ただしこれをやると、今先生がおっしゃられたように、明科高校の希望者というのがかなり激減することになると、そうすると明科高校そのものの存続にも、どうやって考えるかというそっちも考えなければいけないと、いうことになると思います。

(中條委員長)

明科高校は、今普通科4学級ですが、1学級は、普通科扱いのスポーツコースということで変えてというか、今年からやってらっしゃって、まだスポーツコースになってからの卒業生は出ていないという実態で間違っていないですか。いいですか。ということで、明科それから梓川それから穂高商業、この辺はみんな4学級ですね。あと田川、豊科ここは6学級になります。あと都市部といわれる、美須々、蟻ヶ崎が7学級、県陵が1学級プラスになったので、深志、県陵が8学級という学級数です。11区で見ればです。ほかにご意見ありましたらお願いします。

先ほどのジョイントの、南農、穂高商業を見たときに、南農が今、農業科3学級、それから穂高商業は商業科で4学級、先ほど学科は違うということがあるにしても、4学級、3学級で今後、当面は数が仮に減らないにしても、10年ではなくてももっと先をみたときには、どの学科でいくか、全体的に当然生徒減というのは見えている中で、仮に商業高校が4学級が例えば3学級になる、それから農業高校が3学級が仮に2学級になると、そういう普通科同士だから、例えば統合メリットを生かせるという、仮にもし前提においたときに、では3学級、2学級になっても専門校という形があるから、小規模校になったとしても維持させておいたほうがいいのか。もしくはやはりスポーツ、学校行事、クラブ活動は別に学科で分けているわけではないですから、先ほどあった、例えばサッカーやりたくても規模的にできないとか、野球をやりたくても9人集まらないとかということは避けるとか、学校行事を考えたときに、ある意味同じく小規模校化という懸念がされるのであれば、ジョイントというか、統合ということも考えられるのではないかとということで、これまでのご意見だったと思いますが、そんな状況にあるということは、踏まえていただいてのご意

見をぜひ、いただきたいと思います。

ご意見ありませんか。ご意見がなければ、私がずっとしゃべっていないといけないので、ここで、いったん棚上げにします。普通科は2番のほうですね。筑摩の全日制廃止での3学級、それから仮に大系線沿線という話もありましたし、それから逆に安曇野地域に南から行く子が多いのであれば、むしろもっと南のほうに、ニーズがあるのではないかとかいうことを含めて、ちょっと議論が戻しますが、2番目のところの部分について、ご意見があればいただきたいと思います。

（鈴木委員）

もう私はこれについては何度も発言しているので繰り返しになると思いますが、11区は減らないということです。ときには6学級増える時もありますよね。そういうことで行くと、果たしてどういうことを大事すればいい、この3学級分をどういうふうに配分すればいいかという、難しい面もあるかと思うのですが、すでに大北については一定の方向があり、出て行くという状況なんですが、やはり地域の子どもは地域でという願いがあり、それをみれば大系線に、この3学級を持って来る、特に大北のほうに持って来る。

（中條委員長）

3学級すべてですか。

（鈴木委員）

でなくても、です。

（中條委員長）

我々が方向付けからすると、統合校7学級規模になるんですが、具体的にはそれにさらにプラス1とか2とかに、するべきだということですよ。ほかにご意見ございますか。

（小口委員）

先ほどの3番のことで絡んでくるのですが、これは2つ合わせた、職業科プラス普通科という鈴木委員さんがいった、線という普通科の枠があればですね、やはり地元にあった形なりで考えてと、それによって南思考が大系線のほうに戻っていただかないと、自分のことって申し訳ないですが、いわゆる松本、塩尻地域では、むしろ普通科は不足していて、その分は諏訪、岡谷に流れている。

そのような自分の都合で、諏訪地区の高校へ行きたいという生徒もいるでしょうが、倍率的に見てもかなり高いと、多分ほかより高いと、岡谷東など結構高い倍率がいつているという状況から見ると。一番いいのは、今いいました、大系線の南思考が、回避をしてそのほうがいいと、松本、塩尻地域に地元の普通科があればいいという、地元のPTAの意見である。

(中條委員長)

私もずっと諏訪方面に通って、また通い出しましたが、むしろ塩尻近辺から松本に行くより、塩嶺トンネルを超えて、岡谷方面がよっぽど近いですよ。南、東が今議論になっていますが、歩いて10分ちょっとです。しかし松本は、あがたの森方面に行こうが、北へ上がろうが、やはり20分近く歩かなければいけないので、歩く距離まで考えると、私も塩尻より間違いなく岡谷方面に行ったほうが近いなという気がします。そういう意味で、結構電車の中に、広丘あたりを過ぎると、南へ行く電車に乗ってくる高校生は確かに多いです。まさに諏訪まで行きますし、あまり地域関係なくいえば、松本から長野の高校に行ったり、それから山梨の甲陵に行ったりする子もいますから、それは個人の選択という意味だと思います。一般論としては多分そうだと思います。ということ踏まえて、むしろ松塩のどこかに、普通科の学級を増やした方がいいのではないかと、いうご意見でした。ほかにないでしょうか。

(長谷川委員)

私は、中学校の進路指導の真っ盛りのところにおり、非常に松本地区は非常に競争率が厳しくすごく驚かされているという感じなので、ただ私立高校も幾つかあるので、併願であったり、いろんな選択肢の中で、希望がとおったり、とおらなかったりという点が非常に多いです。それにしても現状でも分かれば、例えば塩尻の広丘あたりは、中学校から駅に近くなるので、そこから通う子も多いですが、いわゆる進学校を希望する子というのは、今は松本に行きたい、行きたいという感じが非常に強くなっているところであり、そこから漏れて、残念ながらほかの地区ということもありますが、現状から考えてこの倍率の厳しさからするのであれば、松塩地区に普通科の学級数は、もうちょっと欲しいという気がしているところはあって、もし3学級ということであれば、ただこれ以上大規模化したら、高校のほうも大変になるところもありますが、例えば南安曇あたり、南農あたりで少しキャンパスを生かして、普通科の授業をできるようにするとか、そういうことで大系線沿線の、いわゆる学力を確保する場所をつくれたらどうかと、思います。

(中條委員長)

それは、今井委員がおっしゃった南農と穂高を、本当に統合して一方の校地、校舎を空けてそこにということではなく、むしろ統合した高校の中に、総合学科とは違うかもしれませんが、そこに普通科も入れたらどうかという理解でいいですか。違いますか。

(長谷川委員)

希望としては、現在職業科について、私学はありますが、公立高校で、できればお金を掛けなくて、いわゆる職を付けさせたいというのがすごくあり、穂高商業はできればそのまま残ってもらいたいという気持ちがありますが、ただ南安曇農業については、もう少し総合学科的ではありませんが、農学の授業ができる環境を、整えながら農業ができたり、様々な学習ができるようになったり、となればと思っております。

(中條委員長)

農業科と普通科を併せ持った、高校になったらいいのではないかというご意見ですね。ほかにご意見ございますか。

それでは今日、全部方向付けというのは難しそうですし、このままいっても、もう少し論点を包括しないと議論も、やや散漫になるきらいもありますので、いったん今日は無理をお願いして、本来 12 時で終わるべき選定を 1 時間延して 1 時ということにさせていただきますが、今申し上げたような状況の中で議論については、もう少し先にしたいと思います。

次回ですが、ちょっと私、もしくは我々だけで、判断できない部分を前提にしていえば、もうすでをお願いしておりますが、12 月にもう 1 回、1 月はあと 2 回ということで、3 回、我々としてはあと 3 回の猶予があります。

今日もお話が出ておりましたが、実施時期、準備も含めてどう進めていくかと、いうことについては、我々としてそれと統合が、変に絡まないようにということで、議論を分けさせていただいて、棚上げをしてきた経過があって、それを各、個別ケースごとに、どういう準備が必要かとか、どのぐらい検討が必要で、いつからだったらできるかとか、場合によったら来年からできるということも、あるのかもしれませんが、検討したいと思います。

従って、それ以外に通常、議事録は出ていますが、報告書については、我々が、一字一句つくり上げて、どういう形であれ最終報告書という形で、まとめる必要があると思いますので、それを字句の確認はというか、必要になってきます。従って補足意見を盛り込むべきだとか、付記すべきだとか云々を含めて、皆さんの全員のご要望を書く必要があると思いますので、両方を考えると、今後の時間と何をすべきかを考えると、今回はこの続きと、それから実施時期の、ある程度のところまで議論をしないと、残り 2 回で報告書の全部を、確認していただけるかどうかということ、個人的には非常に不安を感じます。

そのつもりで、こちらでもできるだけ効率的な、拙速ではなくて、きっちとした道筋の中で効率的な議論ができるように、資料なり準備は、事務局とご相談しながら進めていきたいと思いますが、そんなことで、多少焦りというものもありますものですから、ぜひ、ご協力をいただきたいと思います。

次回について、もし何かご報告があれば、事務局からお願いいたします。

(西牧主任教育支援主事)

お願いします。次回の委員会ですが、12 月 25 日(日曜日)午後。時間と場所につきましては、また調整をしまして、改めてご連絡いたしたいと思います。

(中條委員長)

本来は月 2 回の論議を今、申し上げたような状況の中で、12 月については、ほかの推進委員会でも 3 回と、いうようなところもあるようですが、当第四についても、クリスマス当日で、誠に恐縮ではありますが、25 日に設定させていただくということで、また時間調整それから場所のご連絡等は、事務局からさせていただきますのでぜひよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、今日は全員 14 名全員が、そろいまして議論ができました。また年末押し迫り、新年早々ぐらいのペースで、いかないと間に合わないような感じもしますので、年末年始、それぞれ皆さんお忙しい中で恐縮ですが、ある意味、我々の責任として詰めのところにきておりますので、ぜひご協力をよろしくお願いしたいと思います。

それでは本日は本当に、長時間にわたりまして、ご協力いただきましてありがとうございました。では次回は 12 月 25 日ということで、進めさせていただきますのでよろしくお願いいたします。それでは本日第 14 回になりますが、第四推進委員会の推進委員会を終了させていただきます。ありがとうございました。